東北地方北部の縄文中期後半の土器

－大木系土器層位的共伴関係土器集成－

鈴 木 克 彦

１ 序

⑴ はじめに

本稿は，土器の層位的な共伴関係から東北地方北部の縄文中期後半の土器型式編年について考えるものである。より充実した型式内容を確定させるために，発掘調査によって明らかになった遺構内共伴関係に基づいて層位的に検証し，併せて共伴する土器の器形組成や隣接する地域の大木式土器との平行関係を理解しようとするものである。

当該期の土器を一般に大木系土器と呼び（鈴木克彦1976），その大木系とは何かという問題について筆者は既にその大筋を述べている（鈴木克彦1982）ので重複を避けるが，この土器は北海道南部まで影響を及ぼしている（鈴木1976,川内基1988）ように，東北地方南部の大木式の北漸論の所産だと考えている。それが，それまで当該地域に根強かった円筒土器を終えんさせた。

この間の様相は，具体的に泉山式土器の形成に端的に表れている。逆に，このことは円筒土器（上層式）とは何かという問題に係わる。具体的には上層ｄ，ｅ式と泉山式の認識に関する問題である。中期後半の型式編年として当該地域には，泉山式以降，中の平1式，榎林1，2式，中の平2，3式，大曲1式が設定されている（角田文衛1939，鈴木1976）外，円筒土器上層ｅ，ｆ式（江坂輝弥1970，村越潔1974），或いは大木10式平行式（成田滋彦1984，外）などと呼ぶ類いがある。また，特に中期末に位置付けられる大木10式平行の大曲1式は中期と後期の境界に当たるので,中期とは,後期とは何か,という時期区分の問題に派生する。このようにこれら大木系土器諸型式の内容を論じることは，当該地域におけるその土器の出自，発展とその性格を明らかにすることでもあるので，汎東日本的な広域に影響を及ぼしている大木式土器を取り巻く相互の広域編年を理解する効果をもたらすであろうし，逆説的にはそれまで当該地域に根強かった円筒土器とは何かという問題を大木系土器の側から見直す契機となる波及効果を期待したい。

⑵ 型式把握（認定，細分）の方法

学史については既に筆者や成田，柳沢清一が論じている（文献省略）ので本稿では取り上げないし，そのことを詮索するつもりもない。しかし，現在はより確実で豊饒な資料を得ている。未だ確定しかねる問題もあるが，新たな出発点として従来の型式を補訂して再構築したいと思っている。もはや，文様や器形の変化を追い求めて古典的手法で型式を論じる時代（段階）ではなく，層位的，型式学的方法を噛み合わせてこそより安定した型式把握ができよう。換言すれば，例えば遺構内出土の場合，土器の廃棄パターンを十分理解した上でそれが確実に一型式として纏まった資料なのかを型式学的に検証できない，そういう客観的な層位的裏付けのない型式は淘汰すべきである。また，層位的方法の有為性は，前後関係の序列や幾つかの器形の組成共伴関係を知ることができることにあり，本稿ではその層位的根拠に基づいた型式の大枠を把握（規定）したいと思っている。

さて，当該地域の発掘調査に共通する問題は，発掘調査における覆土，埋土一括と報告書に記載される遺構内に出土した遺物の曖昧な取り上げ方（観察）にある。これを改めない限り，幾ら発掘を重ねても問題は解決しない。その遠因は建設的相互批判を忘却したこの地域の考古学土壌の浅さにあるものだが，今一度，関東，中部地方で30年前に実践された土器の廃棄行為（パターン）や型式設定の

方法論を思い起こしてそれに学ぶべきである。近年これを反省材料に一部の地域で層位的発掘を心掛けようとする機運がでて来たのは光明である。山内清男が層位学と型式学を科学的に援用して編年学を樹立した体系が，小林達雄による土器の廃棄パターンの方法論や鈴木公雄による型式の認定方法論によって裏付けられたことをを引き合いに出すまでも無く，発掘調査の層位的観察と土器の分類観察が一体になって，施文される文様構成や施文要素と文様要素，文様帯系統論が器形とその組成関係と共に論じられなければならないのである。

2　中期後半の土器の分類と層位的共伴関係による観察を通した編年の再構築

(1)　1群土器（泉山式相当）

①，層位的根拠

泉山式（鈴木1982）の標識資料である三戸町泉山遺跡のⅠ－1号フラスコ型土壙出土の一括廃棄の土器群（図5）について検証する。これには大木８a式が共伴している。

その類例（支持資料）に，八戸市松ヶ崎遺跡7号，13号，14号，23号住居跡床面（図6），八戸市西長根遺跡3号住居跡床面（図13），六ヶ所村富ノ沢遺跡6号，63号住居跡床面（図22），216号住居跡床面外（図23），276号，288号住居跡床面（図24），432号，434号住居跡床面（図25），青森市三内沢部遺跡3号，6号住居跡床面（図40），などがある。

今度はもう少し対象を広げて見ると，松ヶ崎遺跡19号住居跡床面，3層（図6），西長根遺跡１号住居跡床面，外（図13），六ヶ所村富ノ沢遺跡28号住居跡床面（図22），311号，333号住居跡床面（図24），67号住居跡床面（図26），1号住居跡床面（図28），青森市近野遺跡5号，7号住居跡堆積土（図32），今別町山崎遺跡2号住居跡床面（図34），三内沢部遺跡4号住居跡床面（図40），などの2等資料がある。

これだけ見ても泉山式は揺るぎないものだが，問題はこの2等資料にこそあるとしなければならない。必ずしも一括廃棄と断定しかねる堆積土から出土したものを含むが，泉山式標識土器群の範囲を越える土器例えば隆線文即ち従来の円筒土器上層ｄ式のメルクマール文様を施文する土器などを含むからである。

②，分類の方法

次に，これらの土器群を主として施文要素から分類し，文様要素を考慮する。本来は，土器の形態，器形，地文などの全体を説明しなければならないが，必要に応じて記し，要点を記述する。（要点だけという意味では以下同様である。）

１類：隆線文

この施文要素には，ａ所謂胸骨状文，ｂ弧状線文と，ｃ両者を併用，ｄその他渦巻文，鋸歯状文，の文様要素がある。これは，2類，3類同様である。隆線文はⅠ文様帯にも施文されるが，通常はⅡ文様帯を形成する。Ⅱ文様帯には幅広いものと狭いもの，さらに痕跡程度に施文されるものなどがある。一般的に上層ｄ式とされる。しかし，この考え方，把らえ方には疑問がある。その理由は，施文要素の違いだけで文様要素や文様構成の同じモチーフを別類立てできるかという問題である。ただし，1類には量的に少ない。

２類：隆起線文＋沈線文

1，3類と同じ文様構成とは，ａ所謂胸骨状文と呼ぶ縦位と横位を組み合わせたもの，ｂ弧状線文を重畳する，ものなどである。一般的に上層ｅ式とされる。これにも，上記と同じ理由で疑問がある。

３類：沈線文

１群土器では最も多く見られる施文要素で，文様要素，文様構成は，１，２類同様である。一般的

に上層ｅ式とされる。

４類：その他（撚紐押捺文等）

口端つまりⅠ文様帯やⅡ文様帯に稀に撚紐押捺文で施文するもの（図16－21）がある。大木8ａ式（図5－17）にも用いられる。それが異型式同類かは検討を要する。

⑵ ２群土器（中の平１式相当，松ヶ崎式），（図1）

①，層位的根拠

かって筆者は，泉山式と榎林式を繋ぐ１群の土器の存在を考慮して中の平１式を念頭に置いた（鈴木1982）。しかし，その際に提示した資料は必ずしも十分なものではなかった。そこで，このような中間型式というものが存在するかどうかという問題を念頭に置いて，再度この問題を考える必要がある。しかし，標識としてよい類例を図1に掲載したが，それは次の松ヶ崎遺跡出土土器に基づいているので，松ヶ崎式とした方がよかろう。

泉山遺跡Ⅱ－30号住居跡堆積土（図5），松ヶ崎遺跡1次9号住居跡堆積土（図7），2次9号住居跡堆積土（図9），富ノ沢遺跡327号住居跡床面（図24），或いは381号住居跡床面，堆積土（図25）を含めてよいかもしれない。

問題は，この2群土器が1型式に止揚できるのか，或いは1群土器の中での時間差を示す段階差なのか，という点である。その際，以前筆者が榎林1式としたものの一部が含まれる可能性がある。恐らく，一型式に止揚されると思われるが，大木8ａ式が伴う。特に，壷形の出現に注意したい（図7－14，図9－11）。

②，分類の方法

Ⅰ文様帯以外には隆線文を用いることがなく，Ⅱ文様帯には沈線文の施文及び文様要素の弧状線文を基調とした襷掛け状の文様が施文される。Ⅱ文様帯の幅は狭く，稀に胸骨状文の名残りである懸垂文を見る。しかしながら，最大の特徴はその形態である。1群の土器が平縁に小さな突起を付けたようなものが通有であったが，この土器群は波状縁を呈し，口頚部以下の器形のプロポーションが幾らか膨らみを帯びてくることと，Ⅰ文様帯に凹線ないし沈線が引かれ，時には榎林式の最大の特徴である渦巻き状文が施される。問題があるとすれば，この土器群の文様要素が極めて単一であることだが，松ヶ崎遺跡2次9号住居跡などで大木8ａ式土器を共伴する。施文要素が単純なので，分類方法を変えて文様帯に注意したい。大木8ａ式（図9－1）のⅠ文様帯は幅広い。図9－2が大木式にあるかどうかは未調査だが，やはり幅広いⅠ文様帯を形成する。通常，在地土器はⅠとⅡ文様帯が上下に接続していたが，この段階からこの間に空白帯が形成される。恐らく，大木式からの影響によるものであろう。そのより強い影響が行われるようになるのである。

１類：Ⅰ文様帯が１群と同じもの

ａ類：施文要素が沈線文，文様要素がｂ弧状線文で，Ⅱ文様帯が横位沈線文で文様帯区画されるもの（図1－3）。

ｂ－1類：ａ類にⅡ文様帯が横位沈線文で文様帯区画されないもの。そして，懸垂沈線文による中線を施文するもの（図1－1）。

ｂ－2類：中線（垂線）を施文しないもの（図1－2）。

ｂ－3類：Ⅱ文様帯の横位沈線文の下位に１列弧状線文を施文するもの（図1－4）。後にこれが継続する（図１－１１）。

２類：Ⅰ文様帯が幅広い沈線文（凹線文）

ａ－1類：この凹線文の文様要素は，明らかに円筒土器の概念から外れる。Ⅰ文様帯以外は全くｂ

－2類同様である。したがって，両者を分別する理由はⅠ文様帯の違いだけであるが，凹線文と盲穴（貫通しない孔）を組み合わせたもので，Ⅱ文様帯が横位沈線文で文様帯区画されるもの（図1－6）。

ａ－2類：その弧状線文をＳ字状に交差させて襷掛け状文にしたもの（図1－7）。口縁部突起は火炎土器風で，その影響によるであろう。

ｂ類：口縁部突起み渦巻文が施文される点で，次の3群に通じる。文様要素はａ－2類と同じものである（図1－5）。

3類：幅広いⅠ文様帯を形成するもの（図1－8）。渦巻文が施文される。

4類：Ⅰ文様帯とⅡ文様帯を形成するもの（図1－9）。

5類：壷形（図1－10）である。

さて，大木8ａ式相当の3～5類は，松ヶ崎遺跡1，2次の9号住居跡（図7，9）の層位的共伴関係による。これによって大木式との相互の関係を知ることができる。

⑶　3群土器（榎林式相当）

①，層位的根拠

筆者は，榎林式を2細分したことがある。その妥当性は，松ヶ崎遺跡2次29号住居跡（図9），西長根遺跡9号住居跡（図14），富ノ沢2遺跡246号住居跡（図23），反面，その妥当性を欠く松ヶ崎遺跡2次31号住居跡（図9），西長根遺跡10号住居跡（図15）の2者がある。型式学的に細分できると考えるが，最近では3段階区分を考慮しているので，西長根遺跡10号住居跡4～5層の一括廃棄の資料に対する問題を解決するまでは，その細分をしない。

②，分類の方法

大木式の波及の所産によって2群では器形組成に変化が生じていた。この傾向は更に強まる。その結果，Ⅰ文様帯を形成しない器形（図1－13，27）が生まれる。深鉢形，鉢形，壷形に近い器形があるが，明確な壷形（図1－26，29）と口縁部が内湾するキャリパー形（図1－24）は搬入である。波及という意味では同じでも，以後当地に定着した器形（図1－20，22，23，27，28）とがある。

3群は文様構成が比較的複雑になるので，上記との分類の整合性を取るために，Ⅰ文様帯を形成するもの（図1－11）とⅠ文様帯を形成しないもの（図1－13）の違いの記載を省略する。また，例外を除いて全て沈線文を施文要素とするのでそういう施文要素の分類もしない。また，Ⅰ文様帯の凹線文及び渦巻文，体部の曲線文も自明の理なので敢えて記載しない。Ⅱ文様帯が，体部全体にわたることが最大の特徴である。また，前型式に萌芽した特徴的なⅠ文様帯の凹線文はゼンマイ状になって定着する。大木8ｂ式が伴うことが多い。

1段階と2段階の様相を図1に示した。ゼンマイ状のⅠ文様帯に弧状線文をⅡ文様帯に施文するもの或いは多用するものが古く，Ⅱ文様帯に曲線文様を施文するものが概ね新しいと思う。この曲線文様の文様要素や文様構成とそれらの組み合わせによって細分できよう。1段階の好例が松ヶ崎遺跡2次31号住居跡（図9）で，15～17,20が共伴関係にある。半粗製（20）は段階分けする基準にはならないが，20は3段階には伴わないであろう。次の段階の好例が西長根遺跡9号住居跡（図14），3段階が松ヶ崎遺跡2次29号住居跡（図8）などだが，細分には11号住居跡（図8）などと共に詳細な検証を要する。ただ，次の4群土器との違いは泉山遺跡Ⅱ31号住居跡（図5）の層位差によっても判明している。

⑷　4群土器（中の平2式相当），（図2）

中の平2式は，当時筆者が三戸村中の平遺跡の発掘を通して，主として岩手県などの他地域の資料を念頭に置いて，2式から中の平3式の成立にヒアタスがあることを考慮して設定したものであった。この考え方自体は決して誤りでないことを知る好例が岩手県九戸村田代遺跡Ａ4号住居跡床面出土資

料（図43－1，2）で裏付けられたが，近年より良好な資料が得られている。しかしながら，田代遺跡ほどの層位的な好例がまだ青森県には層位的に確認されていない。西長根遺跡10号住居跡，外（図15，図12－9～14，外），富ノ沢遺跡（図20－1，5，11），野辺地町槻ノ木遺跡（図42－24～26，28，29）など類例は少なくないので，型式学的に類別することができるものの当座中の平2式（或いは田代式）を考慮しておきたい。大木9式と平行すると思っている。

⑸ **５群土器（中の平３式相当）**，（図2）

中の平3式を設定する際にはかなり広範囲な資料を調査したので，敢えて津軽半島北部の遺跡ながら中の平遺跡（青森県教育委員会1975）の資料でこれらの型式を設定した（鈴木1976）。中の平3式自体はその類例に下北半島地域の川内町野家遺跡などの資料を利用したように，筆者自身は岩手県地域などとは地域差があるものと考えていた。その当否を論じるに足る好例が，西長根遺跡，富ノ沢2遺跡などで出土している。特に，予測したように西長根遺跡では大木9式との平行関係を知る資料が層位的に把握されているので，この時期の青森県における地域性を語ることができるようになった。

①，層位的根拠

層位的な事例は，松ヶ崎遺跡1号竪穴堆積土（図7），2次27号住居跡床面（図9），西長根遺跡4号住居跡堆積土（図13），富ノ沢遺跡38号住居跡堆積土中位，56号住居跡床面（図22），102号住居跡床面（図23），山崎遺跡8号住居跡床面（図34），階上町野場5遺跡12号，15号住居跡床面（図37），などがある。層位的なものでなければ量的に類例が多く，これらから判明する問題は多い。つまり，この土器群には時間幅があることと，地域差が顕著であること，更には従来あまり知られていなかった大木9式などの豊富な内容を示す土器との共伴関係が明瞭になってきたことである。

②，分類の方法

地域差の問題については，津軽，下北地域と南部地域との違いを，大木9式のあまり貫入しない地域としての前者とそれが顕著になる後者とを指摘できる。津軽，下北地域の中の平3式に対して，南部地域に西長根遺跡4号住居跡を標識にして上記の松ヶ崎遺跡の類例を支持資料として西長根式を設定してもよいだろう。図2にはそのことを念頭に掲載した。その際の違いは，主として施文手法と文様モチーフに求められる。或いは，地文の縄文の上に沈線文で文様を施文する津軽，下北，磨消縄文の発達する南部，という具合にも区分できる。これは器形上の差異にも表れている。口頸部が大きく「く」の字状に屈折する広口壷と呼んで差し支えない器形を主体にする中の平3式，口頸部が弓なりにカーブする深鉢形の器形を特徴とする西長根式である。ただし，当該地域を一律に捉らえるならば，学史的に中の平3式である。

その一方で，中の平3式と西長根式は同じ大木9式平行の土器として時間差を示すということも一応考慮してみたが，層位的に見てその可能性はなく，地域性の問題に止揚されるものであろう。中の平3式については既に詳述しているので重複を避ける。

在地の当該期の土器には原則としてⅠ文様帯が形成されない（図2－25，27，外）。一面これは画期的なことだが，そのベースは既に榎林式に伏線（図1－20，22，23，外）があると考える。Ⅱ文様帯は，中の平3式では「く」の字状に屈折する口頸部の下の体部にあるが，西長根式の場合は口頸部から体部下半部にかけて長い。この文様帯の形成の仕方が最大の特徴と言える。つまり，前型式のそれと同じなのである。Ⅱ文様帯が上下２段になる場合（図13－15，27，32）がある。後の型式すなわち，原則としてⅡ文様帯が口頸部つまり体部上半部にある大曲1式の文様帯との違いが大きい。ところが，中の平3式に伴って大曲1式の文様帯形成の仕方がこの段階に開始することを示す富ノ沢遺跡の資料（図23－1）は看過できない。これに類似する文様を示すもの（図22－31）がある。或いは，図7－25，図

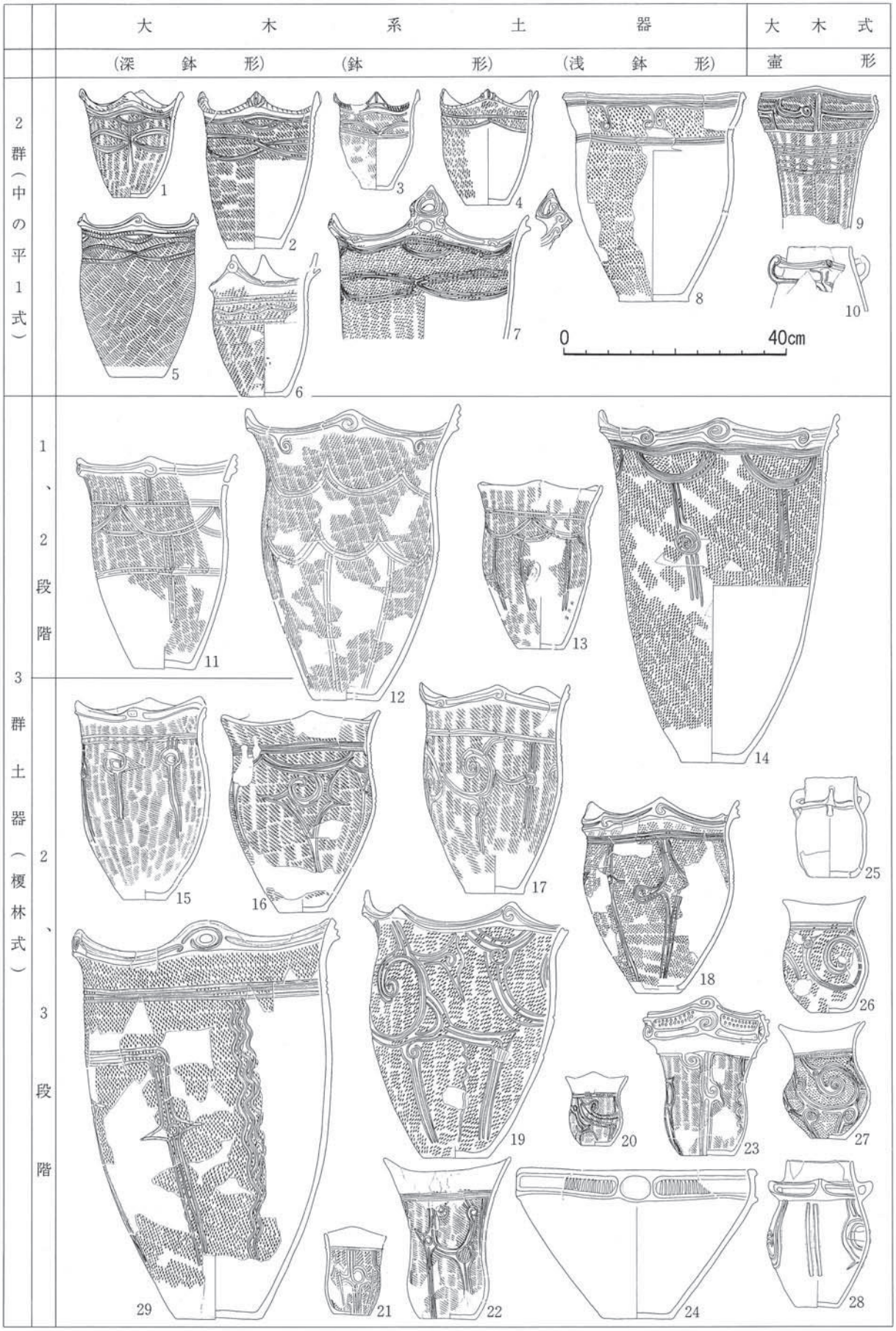


図1　青森県の縄文時代中期後半の大木系土器編年（1）

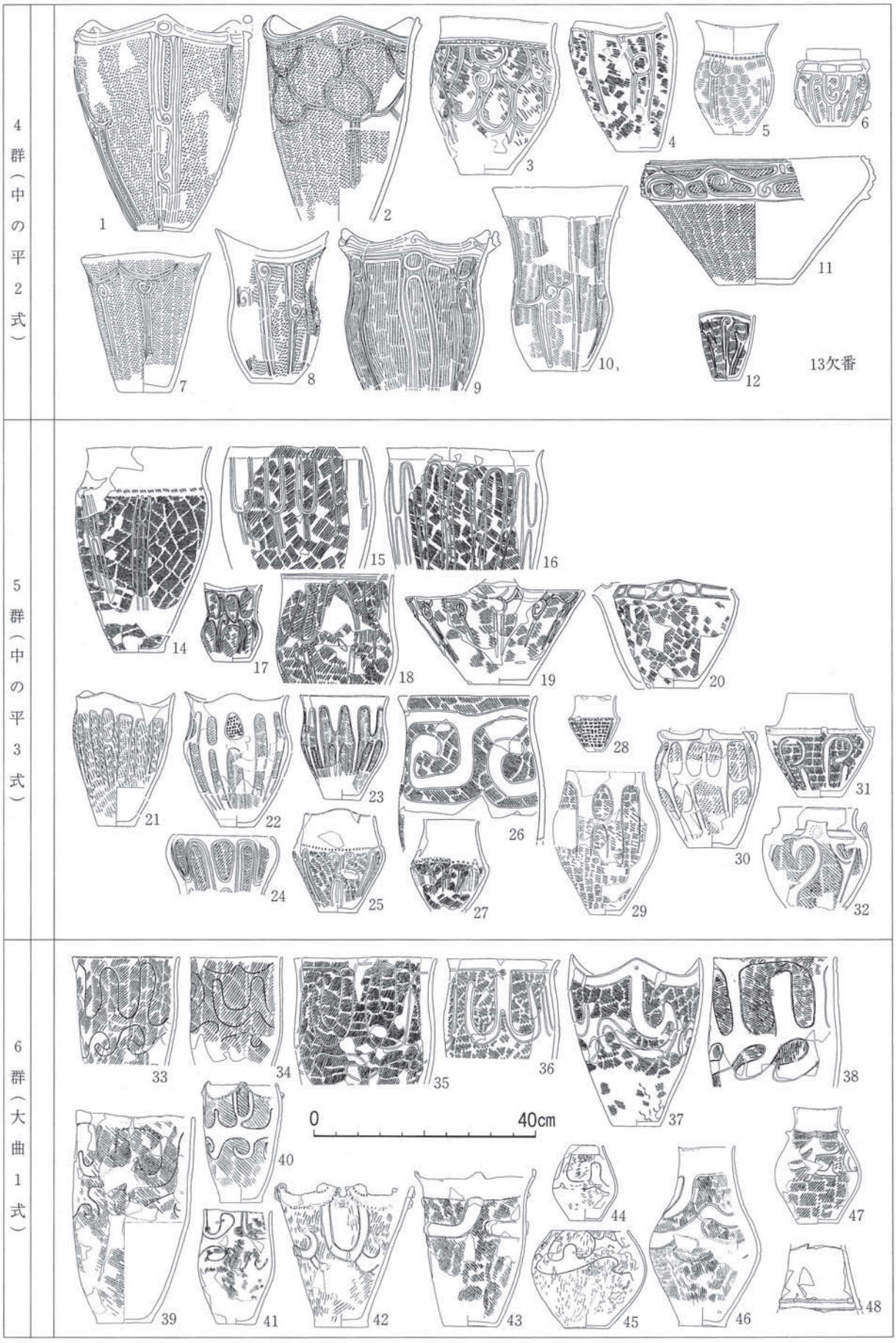


図２　青森県の縄文時代中期後半の大木系土器編年（２）

13－12，30，図37－10も含めてよいかもしれない。恐らく，その25に開始する形で変化してゆくものであろうが，いずれも共伴関係にあるものは中の平3式の範囲を超えない。しかし，まだその系譜は分からないが，次型式には変化してゆく。文様（要素，構成）についての分類学的考察を行う余裕がないが，図2にはできるだけ層位的観察に基づいて一見して全容（大枠）が分かるように示した。

⑹　6群土器（大曲1式相当，富ノ沢式），（図2）

大曲1式は，鯵ヶ沢町大曲1号遺跡（田村誠一1968）の資料（1，2類）に基づいて，筆者が再編成した上でこの遺跡名を取って設定したものである（青森県教育委員会1975）。当時既に大木10式に平行すると思われる土器は存在していたものの，それらとこの遺跡の土器が共伴する確証を得られなかったのでその編年的位置付けを後期としたが，今では大方のとおり大木10式に平行するとしてよいであろう。近年，良好な資料が富ノ沢2遺跡（青森県教育委員会1991）で得られたので，富ノ沢式として新たな型式名に止揚してその是非を論議したいとも考えているが，大曲1号遺跡の資料自体の評価は不動なので当座変更しない。当該期の土器群については既に成田滋彦（1984）などが論じている（山崎遺跡・青森県教育委員会1982，柳沢清一1980，1993）ので参照されたい。山崎遺跡の報告書で小笠原善範は充填磨消縄文を施文する1類と地文（縄文）の上に沈線文を施文する2類に分類し，成田はそれが東と西の地域性を表すことを指摘した。しかし，前型式の中の平3式，西長根式に見る地域性を継承しているとは言えようが，富ノ沢遺跡など作図に示した東の地域の類例を見るとそうではない。階上町野場5遺跡の類例（図37～39）があるものの，もう少し南部地域の類例増を待ちたい。

①，層位的根拠

類例自体は決して少なくはない。現状での層位的な把握として，富ノ沢遺跡8号，29号，31号，42号，57号住居跡床面（図26），58号，99号，110号，124号住居跡床面（図27），4号住居跡床面（図28），野場5遺跡27号，121号住居跡床面（図37），101号住居跡床面，121号土壙堆積土（図38），三厩村宇鉄3遺跡Ⅱ層出土土器（図41）がある。

②，分類の方法

中の平3式の広口壷とも言える特徴的な器形は，恐らく壷形に吸収されて収束（終息）されるであろうごとく，壷形が多くなる。富ノ沢2遺跡の類例（図26，27）から，U（コ）字，J字などの文様モチーフは前型式から大方を引いていることも分かる。最大の特徴は，Ⅱ文様帯が体部上半部に求められることと，その文様帯の下位に波頭文が施文され，文様帯区画が施されることである。勿論，前型式同様，地文（縄文）の上に沈線文で波状文などの曲線文を施文するものと，磨消縄文を施文するものとがあり，それが共伴関係にある（図26，27）。そして，両者の違いの中に磨消縄文であるか否かを問わなければ沈線文による文様の描き方がほぼ共通しているものが多いことが分かるであろう。しかし，幾分文様モチーフに違いがあるものもあるし，Ⅰ文様帯に相当する部位が狭く折り返し口縁になるもの，鰭（舌）状の偏平な突起を持ち始めたり，再びⅠ文様帯が形成される。稀に，隆線文を持つものが表れたりするなど，時間差を表すと思われる大小の変化が見られる。この問題は，層位や遺構の切り合い関係などによって検証されなければならないが，この型式（範囲）の最後が中期と後期の時期区分上の境界になるので慎重に検討すべきである。そういう意味で，野場5遺跡101号住居跡の層位的な出土例（図38）に見る土器の変化は重要である。特に，その堆積土上位のⅠ文様帯における隆線文と撚紐押捺文を施文する類例はその境界に相当しよう。これを後期とするかはここで結論づけないが，幅広いⅠ文様帯は後期であることのメルクマールには違いない。したがって，この問題を課題として，少なくとも大曲1式はモチーフの上で中の平3式ないし西長根式に近いか類似したモチーフを施文するものと，野場5遺跡の示す資料によって細分することができる。

3　中期後半の編年に関する諸問題

当該期の土器型式については論議されることさえなく，各地で発掘調査が行われながら以前守旧的なものであった。これほどの発掘増があれば，其学の発展のために発掘を担当する者が当然それらの是非を含めて補足修正などの検証を行った上でより確実な型式に止揚する責任を負っているにも係わらず，発掘でしか検証できない最も大事な作業を怠ってきたのである。冒頭で型式把握の方法を述べた理由である。近年，柳沢清一（1990,91,93）が関連する問題を論じている。その方法はこういった層位的方法と援用してより充実した型式の細分に寄与するであろうが，もはや古典的な机上論で型式を理解したり，議論するする時代ではない。何故なら，在地研究として各地至るところで発掘すなわち，検証の機会が一様に与えられているからである。本稿は従来の土器型式の是非と細分を念頭に置きながらも，できるだけ従来の型式に対する大枠（概念，型式的幅）を規定しようとすることに主眼を置いている。或るものは細分できるものがあるが，それは概念が定まってからでも遅くはないし，その方が正しい順序でもあろう。

ところが，逐一例記しないがこの地域では漠然とか曖昧に大木式とかその平行式という地域性を無視した分類が横行している。例えば上層ａ式を大木7ａ式平行とは言わず，在地の土器（例えば中の平３式、大曲１式）が存在しながらそれを9式とか10式平行の土器とさえ呼ぶ奇妙さで，少なくとも青森県には大木式は殆ど客体的にしか出土しない。確かに似ているものは出土するが，その場合でも搬入程度のもの，或いは岩手県中央部に出土する大木式と呼んでいる程度の亜流な土器を見るだけである。特に，当該地域の類例には本来の大木式の施文手法を取る類例は少なく，その客体的な土器に当てはまるだけに過ぎない。単に大木式の文様モチーフが似ているだけである。そのようなものを大木何式とすることは混乱の元や、大木式を知らない所見である。似た文様を捉らえるなら遥か関東地方の加曽利Ｅ式の文様さえ類似している。

この地域で最も議論しなければならない問題は，大木系土器の開始に関する問題である。言い換えれば，それは円筒土器の終焉，すなわち，円筒土器（上層式）とは何か，大木系土器とは何か，という根本の問題でもある。そのことを具体的な問題として論じることができるのは泉山式或いは従来の円筒土器上層ｄ，ｅ式の是非である。その一端については既に所見を開陳したことがある（鈴木1982）。この点については，東京堂出版刊行（戸沢充則編1994）の『縄文時代研究事典』「円筒上層式の項目」で小林克が指摘してもいる。幸い，最近待望の円筒土器の細別分類を考案し設定した山内清男の「基本写真」が公表された（山内先生没後２５年記念論集刊行会1996）。

筆者の言う沈線文を施文要素とする泉山式に相当する土器，すなわち，少なくとも円筒土器上層ｅ式は，円筒土器ではないと考える。正確に言えば，円筒土器の名称を与えることができない一群の土器だということである。そればかりか，命名した山内清男は上層ｄ式さえも存在しないと述べた（山内清男1964）。円筒土器については山内清男の考えに沿ってできるだけ忠実に捉らえようとすることが大方の踏襲している姿勢である以上，この設定者の意図は尊重しなければならない。最近の資料は，その予言を裏付けているかに見える。

本稿は，沈線文を施文する土器群を対象にしているため円筒土器そのことを問題にするものではないので，ここでは上層ｄ式の問題については言及しないが，この執筆を通して観察した限りでもｄ式は山内清男が予測した通りになるであろうと思っている。その理由を簡明に述べると，まず型式学的な観点から，器形と口縁部突起の形状，沈線文と隆線文の文様モチーフ，文様構成の類似性（同似性），などと共に，上記した１群土器の施文要素の組み合わせの用い方などに表れていることに観察することができる。作図には隆線文を主体にした土器の層位的観察を行っていないが，いずれこの問題につ

いては所見を述べたい。したがって，ここでは円筒土器（上層式）とは何かという問題には直接触れないで，沈線文を主体にした泉山式の問題を通して逆説的にこの問題に迫りたい。

泉山式を認識しようとする時に，沈線文だけに捕らわれることは画竜点睛を欠く。最も大事な視点の一つは，その口縁部突起（図28）であることは上記した。そして，この沈線文による文様構成は隆線文によるｄ式と殆ど類似していることを知るべきである。同じモチーフを施文要素だけで別型式に分別する是非の問題である。施文要素を優先するか，モチーフを優先するか，という択一した議論ができかねる類例が中の平3式に伴って隆線文による土器が1点だが存在する（図22－14）。共伴関係によって把握する好例である。ただし，堆積土中位の出土である。さて，話を口縁部突起に戻すと，それを集成した3遺跡の突起（図28－38～40）の多くは古い円筒土器上層式には無いものだが，このような突起を持つ土器の施文要素と文様構成を観察したものが図28－30～37である。特に，31と36は施文要素と地文（羽状縄文）の違いの外には，器形，突起，モチーフが瓜一つである。従来の判断では36が上層ｄ式，31が上層ｅ式（泉山式）となる。同一型式，別型式にしろ判断基準と層位的把握がなされなければ説得力がないので，発掘を通して議論すべき最優先課題であることを提言する。このような突起を持つ土器群は，山内清男の「基本写真」の上層式以後の土器である。それは，1群土器すなわち，泉山式に最も近似する土器なのである。このような土器群については，古く山内清男から「基本写真」の提供を受けた小岩末治（1960）が40年近く前に筆者（1982）と同じことを述べている（注1）。

1群土器に次いで，2群土器（図2）を認定した。これも「基本写真」の上層式以後の土器である。これが１型式に止揚されるかは，議論と検証をして欲しいと思っている。層位的把握では松ヶ崎遺跡1次9号，2次9号住居跡が指標になるであろう。大木8ａ式が伴う。中の平1式相当だが，内容を少し変更しているので，松ヶ崎式としてもよい。

考えるところがあって，本稿では3群土器（図2）を広く捉らえた。大木系土器が最も盛行したキータイプになる存在なので，細分案には明確な型式観とその説明に心血を注ぎたいと考えたからだが，これの認識と理解は全国区で語るべきものだからでもある。松ヶ崎遺跡には好例が多い。そして，ほぼ同時期に位する西長根遺跡の存在，特に10号住居跡の一括廃棄の類例の器形と文様組成の問題を型式学的，かつ層位的に再検討する必要もある。その折りには，過去の化石的型式である榎林式を解体してさえも松ヶ崎2式としての系統性を考慮に入れてよいとさえ考えている。蛇足だが，二十一世紀の考古学は編年に終始する時代だとは考えていないので，この近距離に位置する二つの遺跡の存在が意味するものを，例えば同じ八戸市での後期前葉の丹後谷地，田面木平1遺跡の関係と同様に土器型式と社会組織（構造）の関係に止揚する問題を視野に入れた考察を視座に取り込みたいと思っている。また，これに共伴する幾つかの土器には広域編年の問題と共に有孔鍔付土器と思われる土器（図9－22，図12－25）さえ共伴する可能性が出てきた。恐らく松ヶ崎式の段階を嚆矢とするであろう鍔付土器や縦位橋状把手の存在もその後の土器を認識する上で侮れない。この恐らく3型式に細分されるであろう土器群の，Ｉ文様帯を形成する土器とＩ文様帯を形成しない土器の器形の共伴関係にもこの土器型式としての構造的な問題が内包されていると考える。後者の器形が，後の中の平3式のベースになっている。

この間の変遷過程を後づけるものが，中の平2式の存在である。西長根遺跡10号住居跡の一括廃棄の土器の解釈問題を解消するまではこの型式を用いるが，中の平遺跡で行った筆者の予測をずばり証明した岩手県の田代遺跡（岩手県埋蔵文化財センター1996）Ａ4号住居跡床面の土器を標識にしてもよいであろう。この中の平2式が介在しなければ従来の榎林式から中の平3式が成立しないのである。

後はどれだけその型式を補填して行くかの問題である。

中の平3式の段階（時期）の持つ顕著な地域性については上述した。これについての段階的な変遷過程は山崎遺跡で考察されている。しかし，その過程には多少の疑問があるが，これは遺構の切り合い関係の把握によって解消される問題である。この段階の，ａ類：地文（縄文）の上に沈線文を引く手法によるもの，ｂ類：磨消縄文を構成するもの，の違いの基本を筆者は地域差だと考えた。3式は2式と共に大木9式に平行するもので，この点については大木9式の「基本写真」を見ても一見して判断されることだが，一歩進めて考慮しなければならないことは，松ヶ崎遺跡1号竪穴の類例（図7）に見られる柳沢清一（1980）が東北地方南部で投じた上原式など（大木9-10式）の問題と同じ問題を抱えていることをどのように認識するかということ（編年）と，西長根遺跡4号住居跡に一括廃棄された土器群に共伴している微隆起線分などの異質な土器（図13－10，12，30）をどのように解釈するかという問題にある。12の微隆起線文の手法といい，30の壷形と言える器形とその文様並びに把手の様子など，或いは松ヶ崎遺跡2次27号住居跡床面（図9），富ノ沢2遺跡74号住居跡床面（図22），102号住居跡床面（図23）など広域に検討すべき課題が少なくない。

中の平3式に後続するものは大曲1式（富ノ沢式）であるが，小笠原（青森県教育委員会1982），成田（1984）や柳沢（1993）が詳細に論じている。最も良好な土器を出土した富ノ沢2遺跡でそれぞれの文様の共伴関係が分かってきたので，それぞれの段階を層位や遺構の切り合い関係などの出土状態によって再検討する必要がある。そして，最大の問題は中期と後期の境界問題である。筆者はそれを，上記野場５遺跡の資料（図38）に基づいて隆線文などを施文する幅広いＩ文様帯の形成に求めた。その是非を課題に残す。

なお、本稿に掲載した青森県に関する当該期類例は、９割以上を掲載している。

注記

注1：筆者の見解については82年論文を参照されたい。小岩末治（1960）は，「次の段階では大木・円筒の両者は殆んど区別出来難くなってしまう。」と述べたのは，彼自身の見解でもあるだろうし，また山内清男から写真だけを借用しただけではなくその考え方をも教わったはずであろうことを物語るであろう。しかし，このことが問題なのではなく，その後の円筒土器の中枢にある我々が40年前に問題視されたことを等閑視してきたことにある。

図版掲載土器出土遺跡（図版キャプション及び図版中に記載した以外の遺跡）

図1－1～4,6～10,16,18,26,27,29,八戸市松ヶ崎遺跡　5,三厩村中の平遺跡　11～15,17,19～25,28,西長根遺跡

図2－1,2,5,7～11,21～25,30,32,西長根遺跡　3,4,岩手県田代遺跡　6,寺下遺跡　11,松ヶ崎遺跡　12,13,泉山遺跡　14～20,26,27,33～47,富ノ沢遺跡　28,29,31,野場5遺跡

図28－30,32,33,36,西長根遺跡　31,荒屋敷遺跡　34,37,38,泉山遺跡　35,松ヶ崎遺跡　39,三内沢部遺跡　40,山崎遺跡

図42－1,四戸橋遺跡　2,荒屋敷遺跡　3,太師森遺跡　4,西長根遺跡　5,10,13,中の平遺跡　6,11,12,16,石神遺跡　7,浜名遺跡　8,14,21,三内丸山2遺跡　9,22,38,42,45,泉山遺跡　10,13,中の平遺跡　15,18,蛍沢遺跡　17,19,弥次郎窪遺跡　20,花巻遺跡　23～30,34,36,槻ノ木遺跡　35,境ノ沢遺跡　37,柴崎1遺跡　39,中宇田遺跡　40,駒泊遺跡　41,田ノ上遺跡　43,44,長者森遺跡　46,妻の神遺跡　47,宇鉄遺跡　48,亀ケ岡遺跡

参考文献（発行年代順）

角田文衛　1939　陸奥榎林遺跡の研究　考古学論叢10
小岩末治　1960　岩手県史上古編
山内清男　1964　縄紋式土器・総論　日本原始美術Ｉ
田村誠一　1968　大曲１号遺跡　岩木山
江坂輝弥　1970　石神遺跡
青森市教育委員会　1970　三内丸山遺跡調査概報
青森県教育委員会　1973　国道280号線道路改良工事（今別バイパス）関係埋蔵文化財試掘調査報告書
村越　潔　1974　円筒土器文化

青森県教育委員会　1974　亀ケ岡遺跡発掘調査報告書
青森県教育委員会　1975　中の平遺跡発掘調査報告書
鈴木克彦　1976　東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察　北奥古代文化8
青森県教育委員会　1976　泉山遺跡
青森県教育委員会　1976　白山堂遺跡・妻の神遺跡発掘調査報告書
平賀町教育委員会　1976　井沢遺跡
青森県教育委員会　1977　近野遺跡発掘調査報告書
青森県教育委員会　1978　三内沢部遺跡発掘調査報告書
蛍沢遺跡発掘調査団　1979　蛍沢遺跡
柳沢清一　1980　大木10式土器論　古代探叢
丹羽　茂　1981　大木式土器　縄文文化の研究4
青森県教育委員会　1981　国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
青森県教育委員会　1982　山崎遺跡
鈴木克彦　1982　円筒土器に後続する土器の編年　考古風土記7
三厩村教育委員会　1983　宇鉄Ⅲ遺跡発掘調査報告
青森市教育委員会　1983　四戸橋遺跡調査報告書
平賀町教育委員会　1983　太師森遺跡
青森県教育委員会 1984　長者森遺跡
平賀町教育委員会　1984　駒泊遺跡
成田滋彦　1984　東北地方北部の大木10式土器周辺　奥南3
鹿角市教育委員会　1984　天戸森遺跡
青森県教育委員会　1986　弥栄平1遺跡
黒石市教育委員会　1986　花巻遺跡
柳沢清一1988　「大木10式土器論」続考察　北奥古代文化19
川内　基　1988　北海道の大木系土器　ひばり10
青森県教育委員会　1989　富ノ沢（1），（2）遺跡
青森県教育委員会　1989　館野遺跡
柳沢清一　1990　『岩木山』編年の再検討　北奥古代文化20
青森県教育委員会　1990　弥次郎窪遺跡
柳沢清一　1991　「榎林式」から「最花式」(中の平Ⅲ式)へ　古代91
青森県教育委員会　1991　富ノ沢（2）遺跡Ⅳ
青森県教育委員会　1992　富ノ沢（2）遺跡Ⅴ
柳沢清一　1993　北奥「大木10式並行土器」の編年　二十一世紀の考古学
青森県教育委員会　1993　富ノ沢（2）遺跡Ⅵ，富ノ沢（3）遺跡
青森県教育委員会　1993　野場5遺跡
青森市教育委員会　1993　三内丸山2遺跡，小三内遺跡発掘調査報告書
戸沢充則　1994　縄文時代研究事典（東京堂出版）
八戸市教育委員会　1994　八戸市内遺跡発掘調査報告書6
青森県教育委員会　1995　泉山遺跡
青森県教育委員会　1995　上蛇沢2遺跡
八戸市教育委員会　1995　八戸市内遺跡発掘調査報告書7
山内先生没後25年記念論集刊行会　1996　画龍点睛
八戸市教育委員会　1996　八戸市内遺跡発掘調査報告書8
野辺地町教育委員会　1996　柴崎1遺跡発掘調査報告書
岩手県埋蔵文化財センター　1997　田代遺跡発掘調査報告書
青森県教育委員会　1997　槻ノ木遺跡
青森県立郷土館　1997　馬渕川流域の遺跡調査報告書

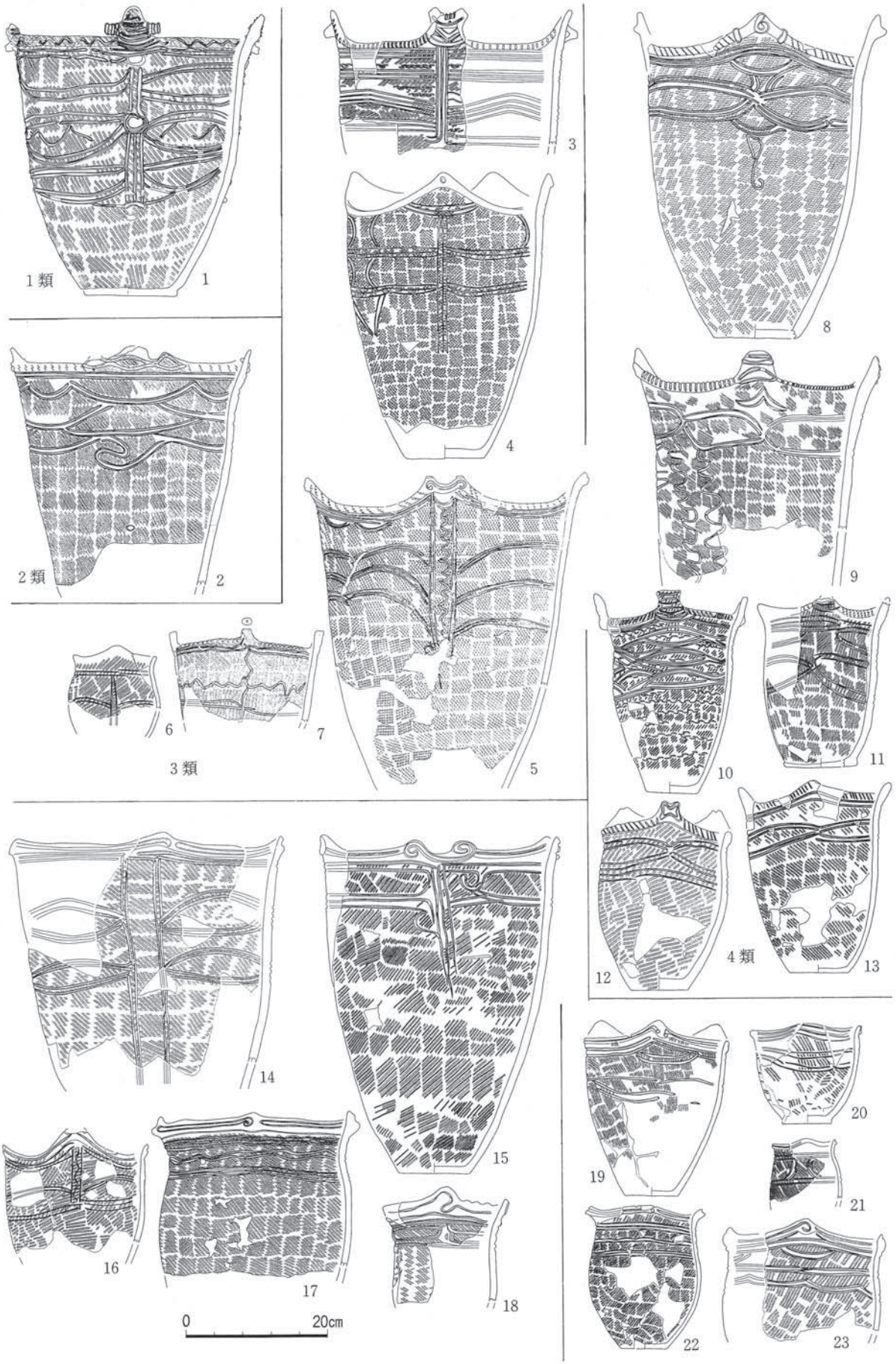
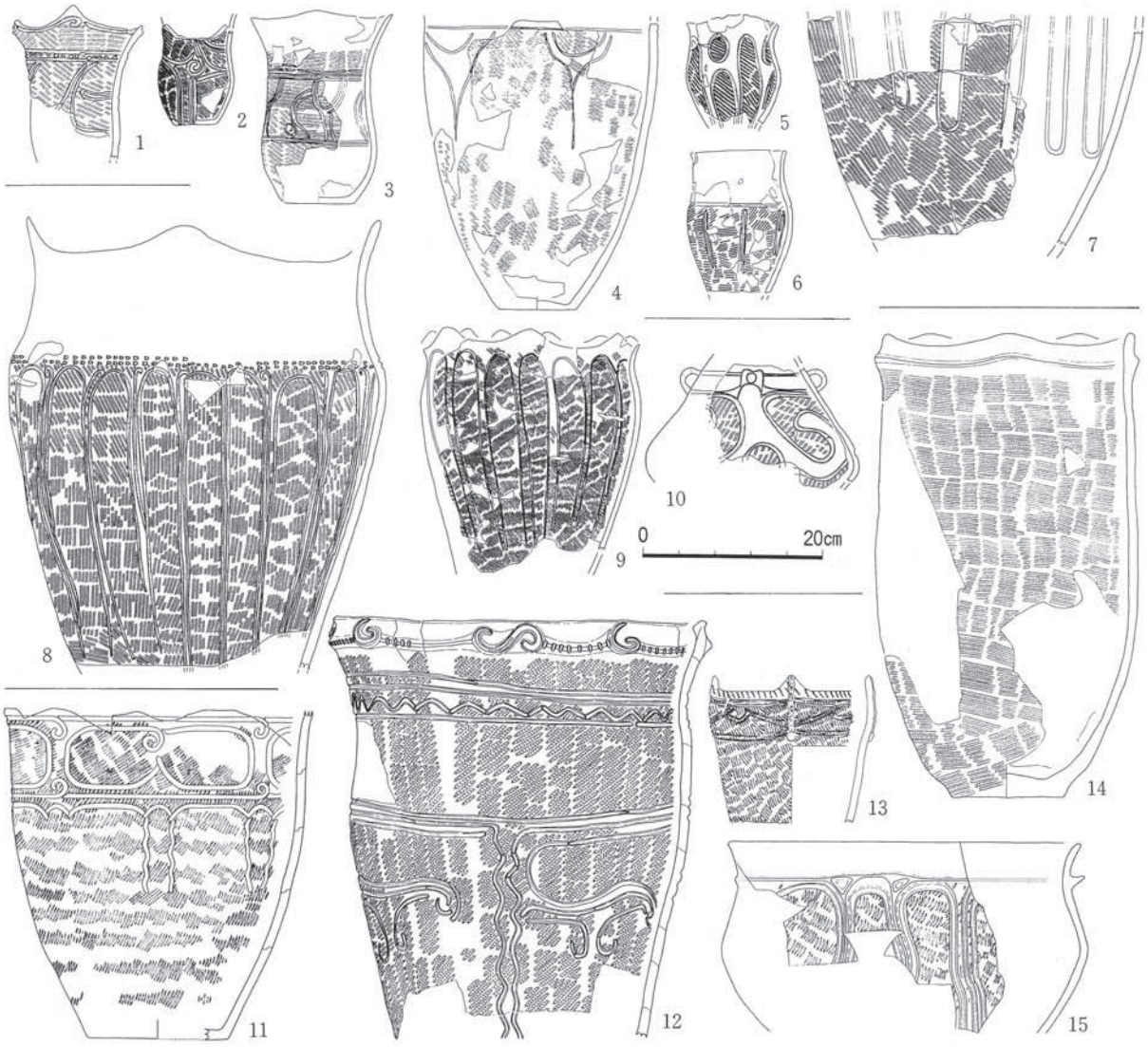
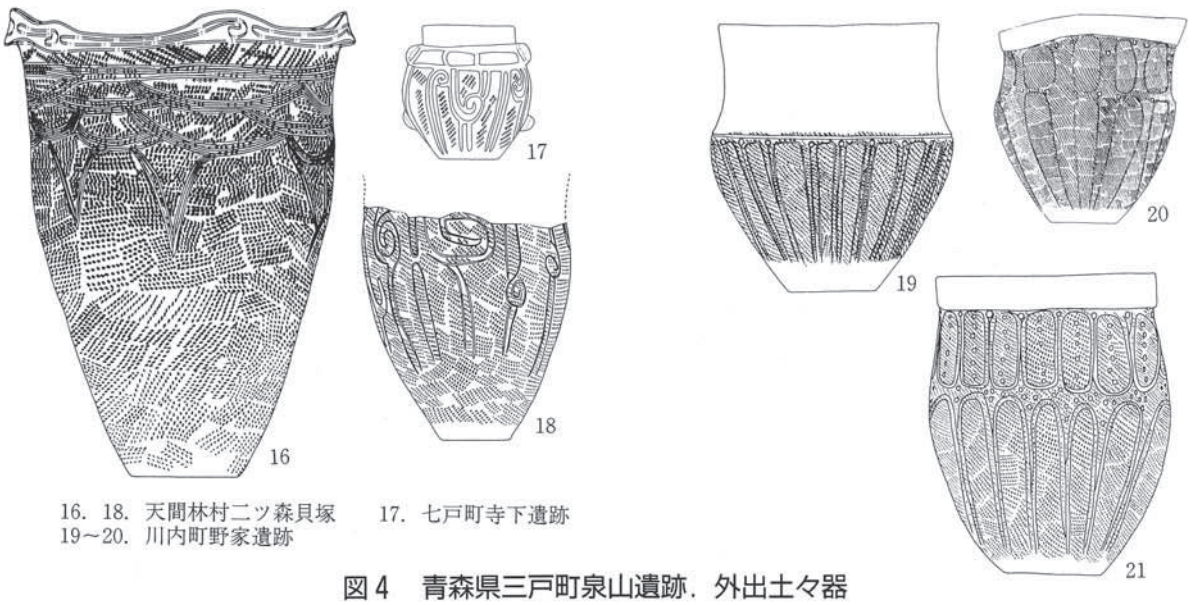


図3　青森県三戸町泉山遺跡出土々器（1）

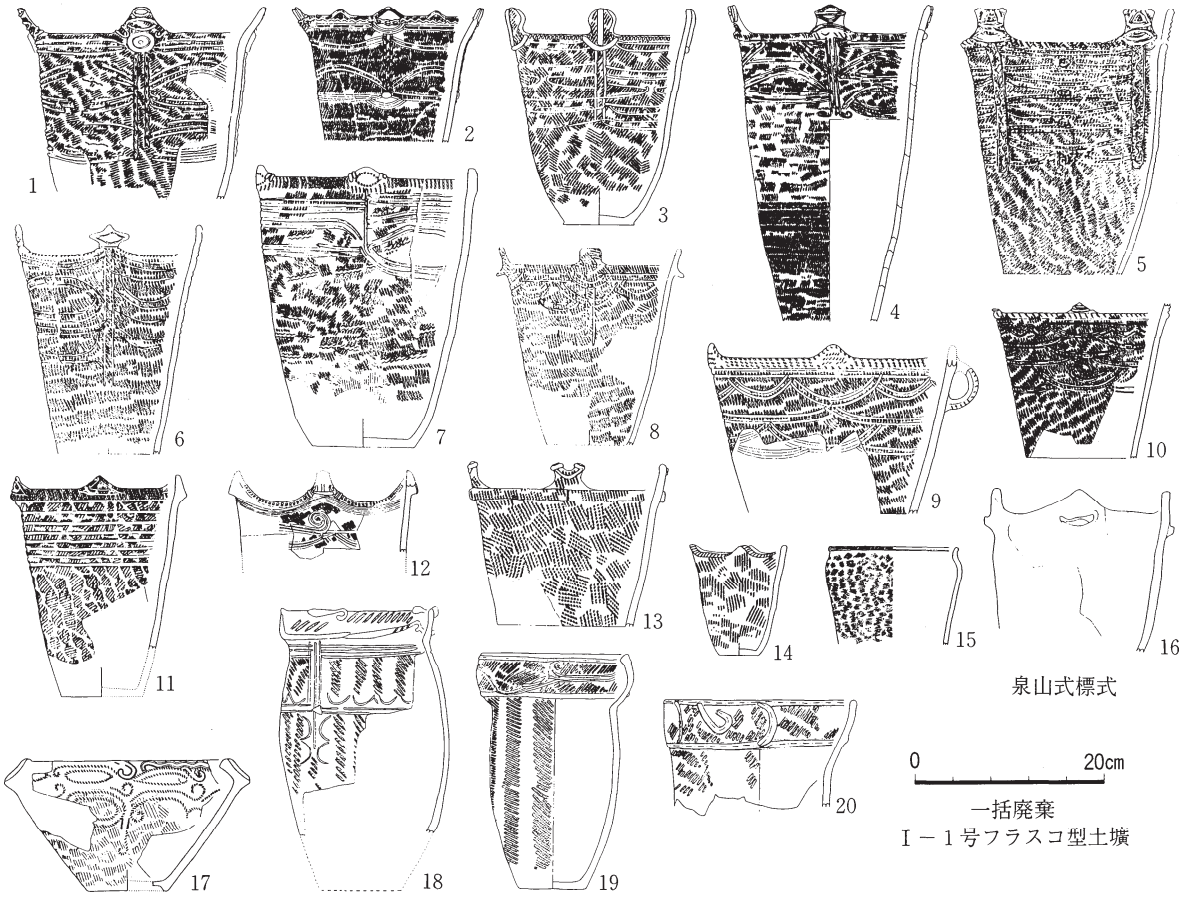


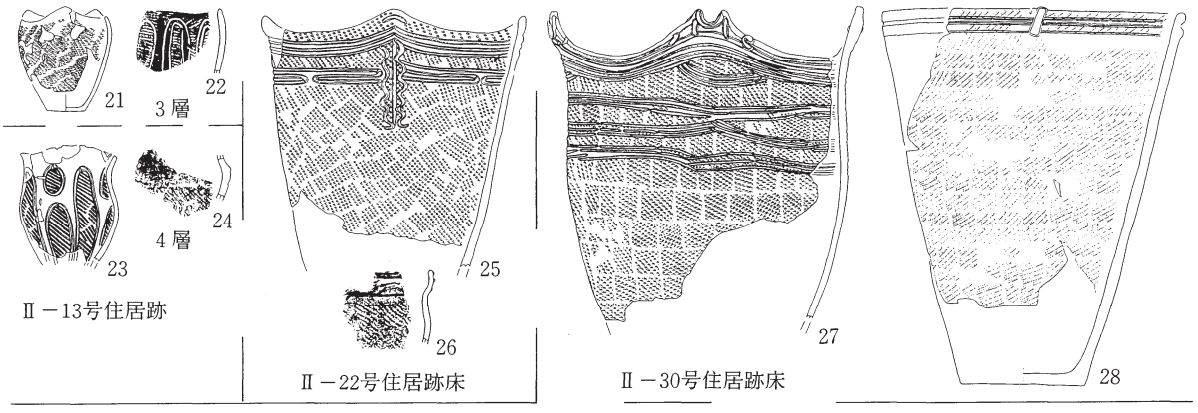
三戸町泉山遺跡出土々器（2）



16．18．天間林村二ツ森貝塚　　17．七戸町寺下遺跡
19～20．川内町野家遺跡

図4　青森県三戸町泉山遺跡．外出土々器





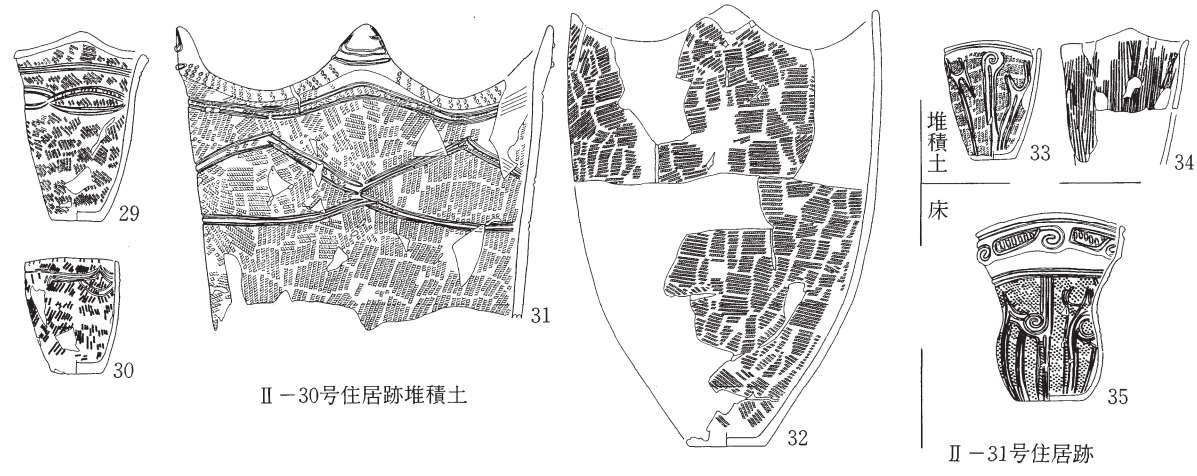


図５　青森県三戸町泉山遺跡出土々器（３．共伴関係）

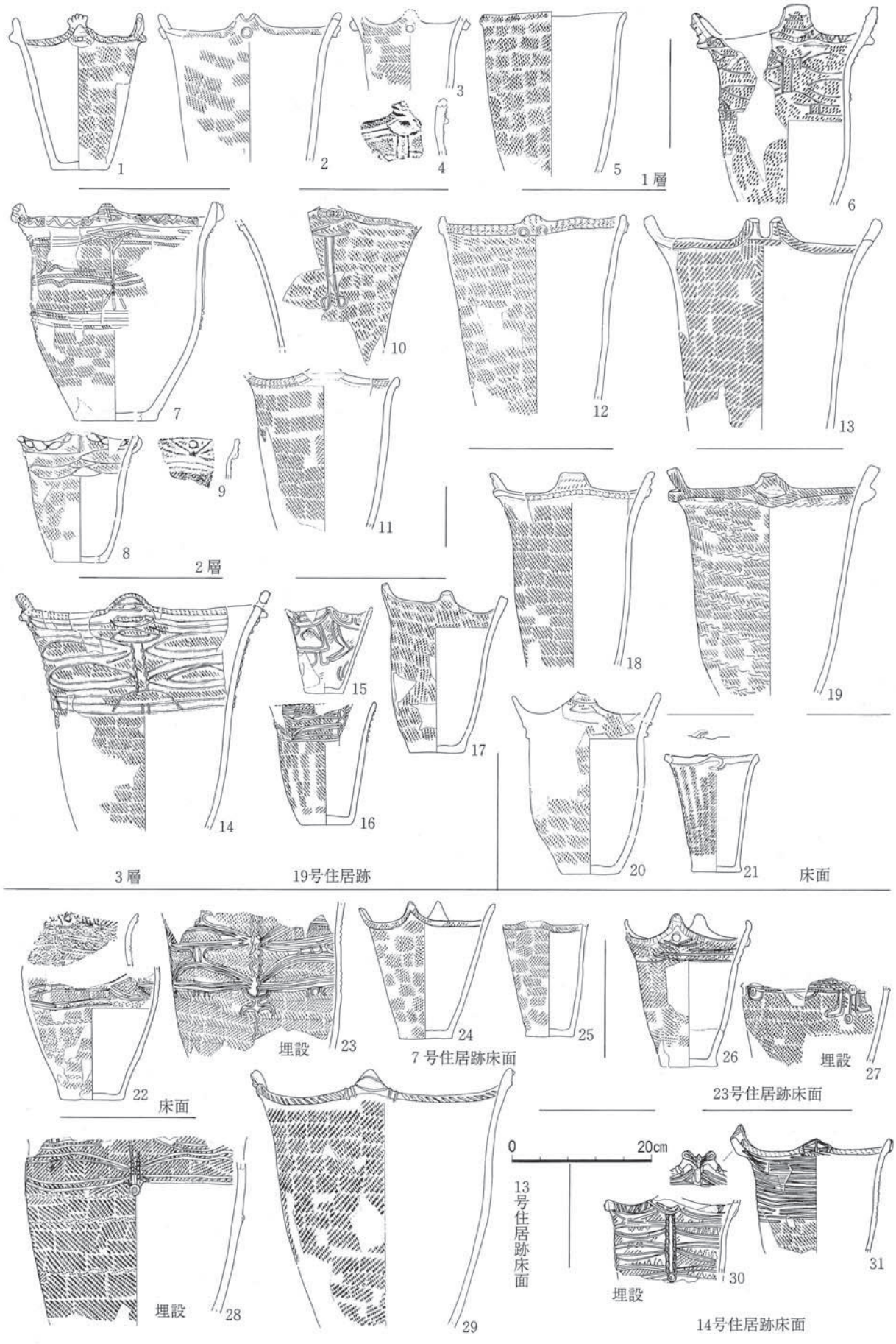


図6　八戸市松ケ崎遺跡出土々器（1．共伴関係）

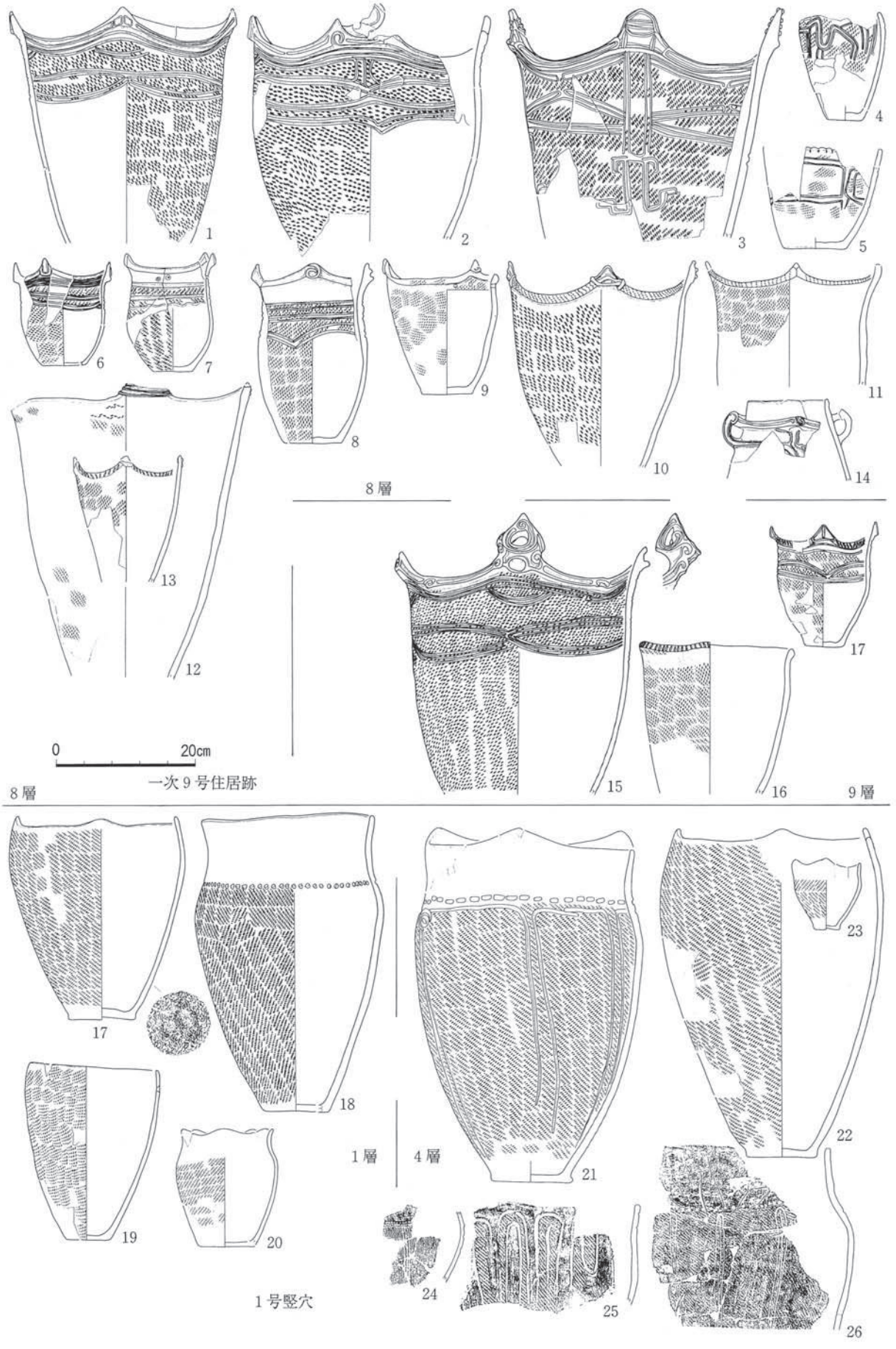


図７　八戸市松ケ崎遺跡出土々器（２．共伴関係）

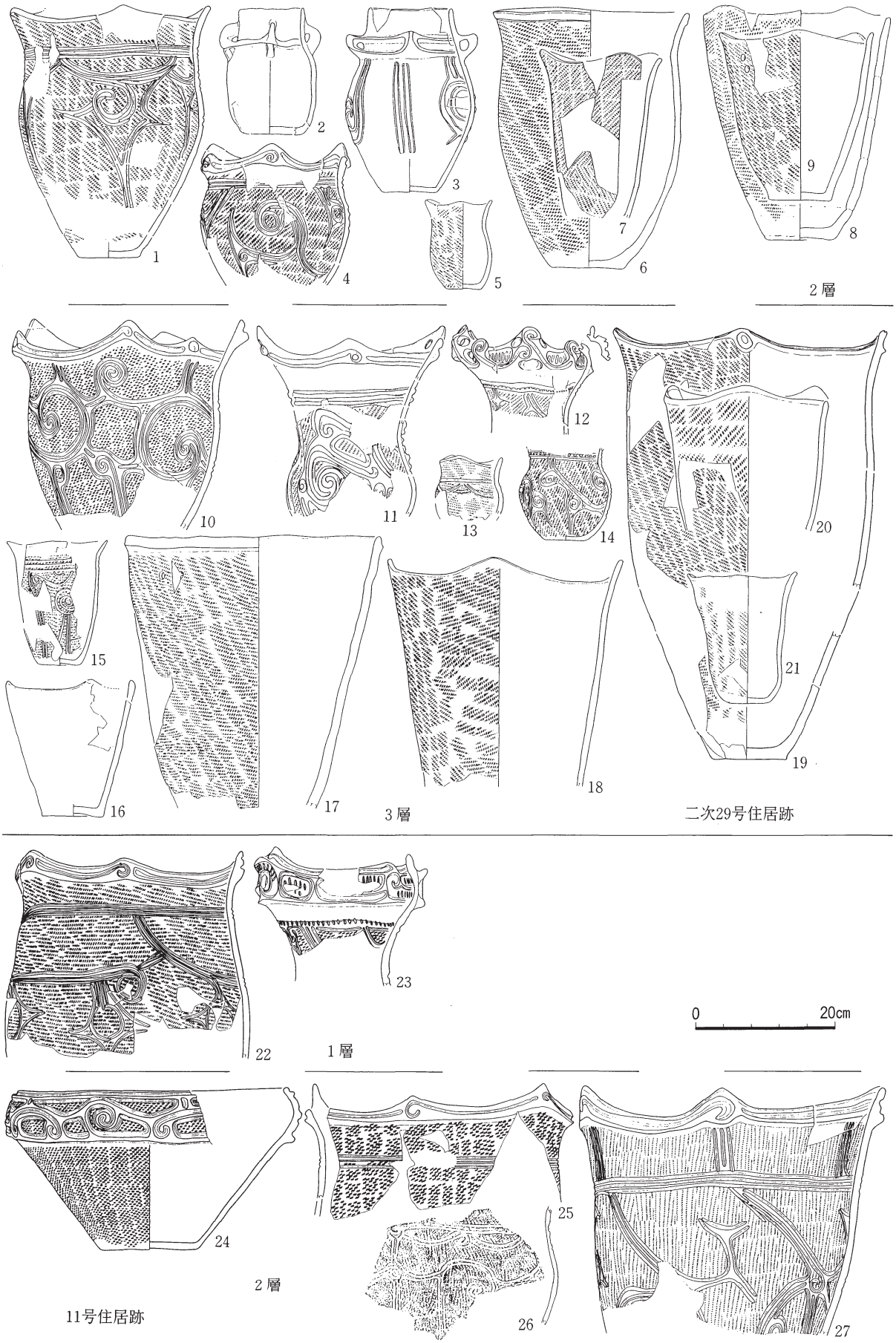


図８　八戸市松ケ崎遺跡出土々器（３．共伴関係）

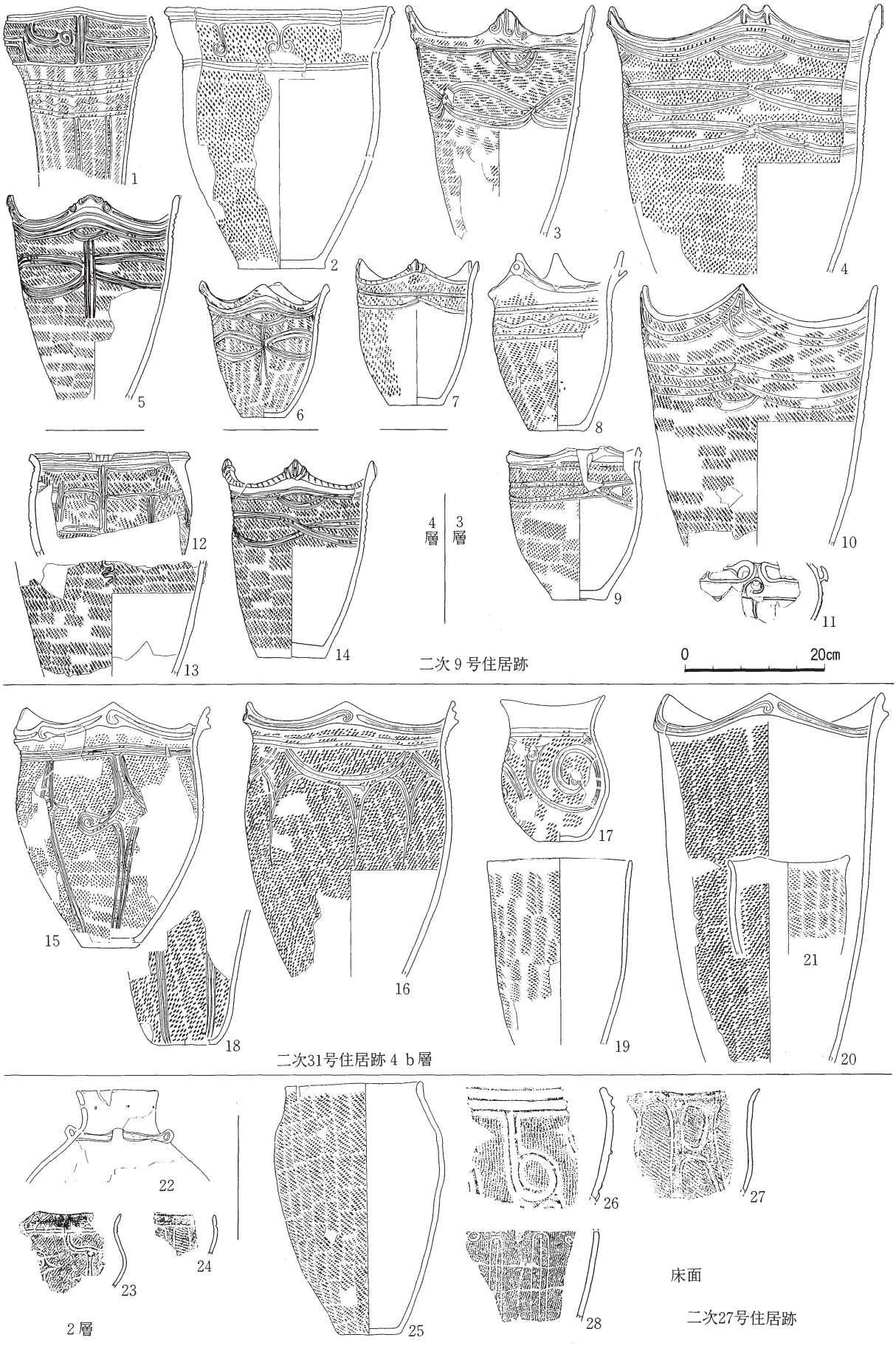


図９　八戸市松ケ崎遺跡出土々器（４．共伴関係）

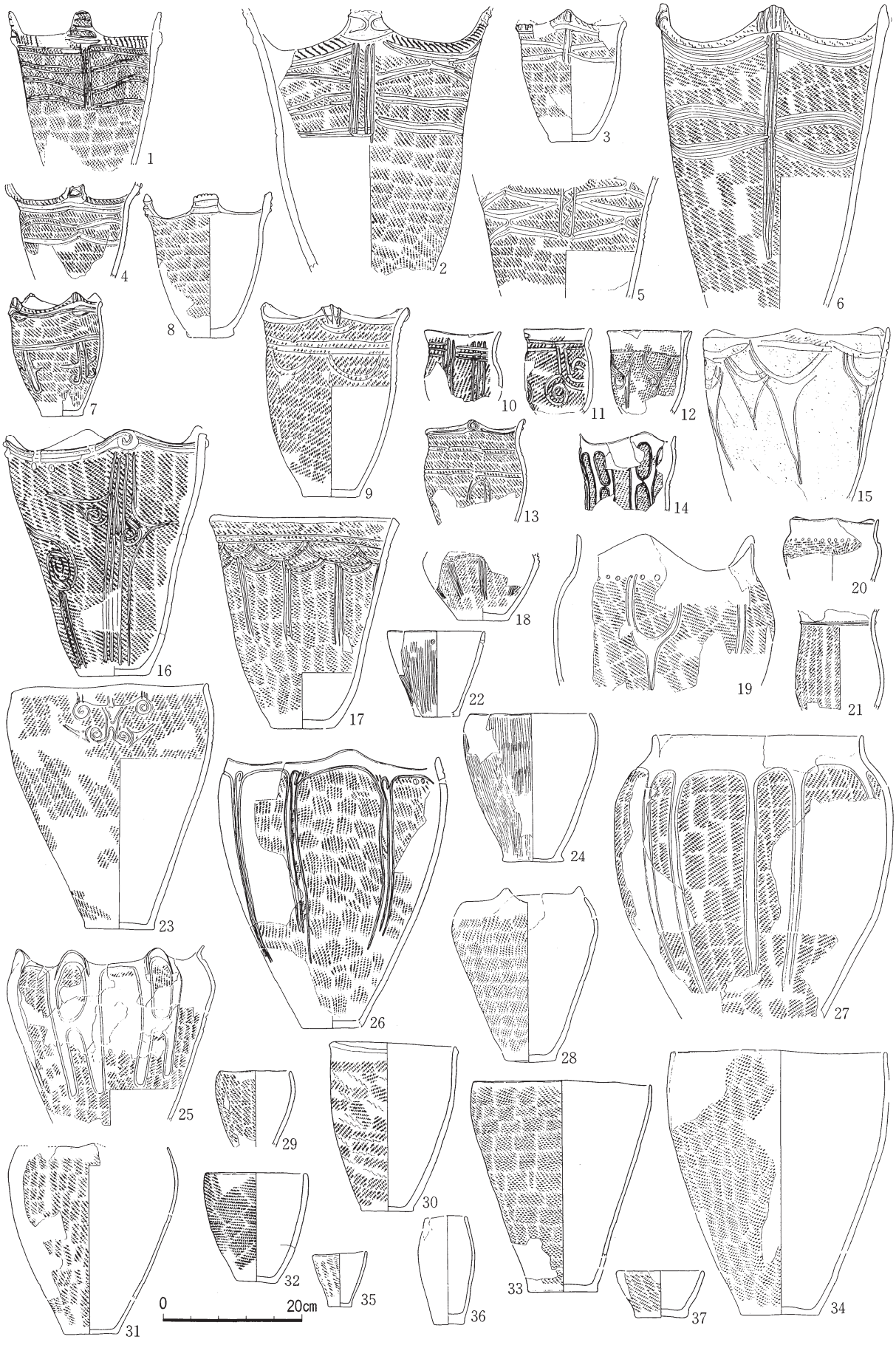


図10 八戸市松ケ崎遺跡出土々器（5）

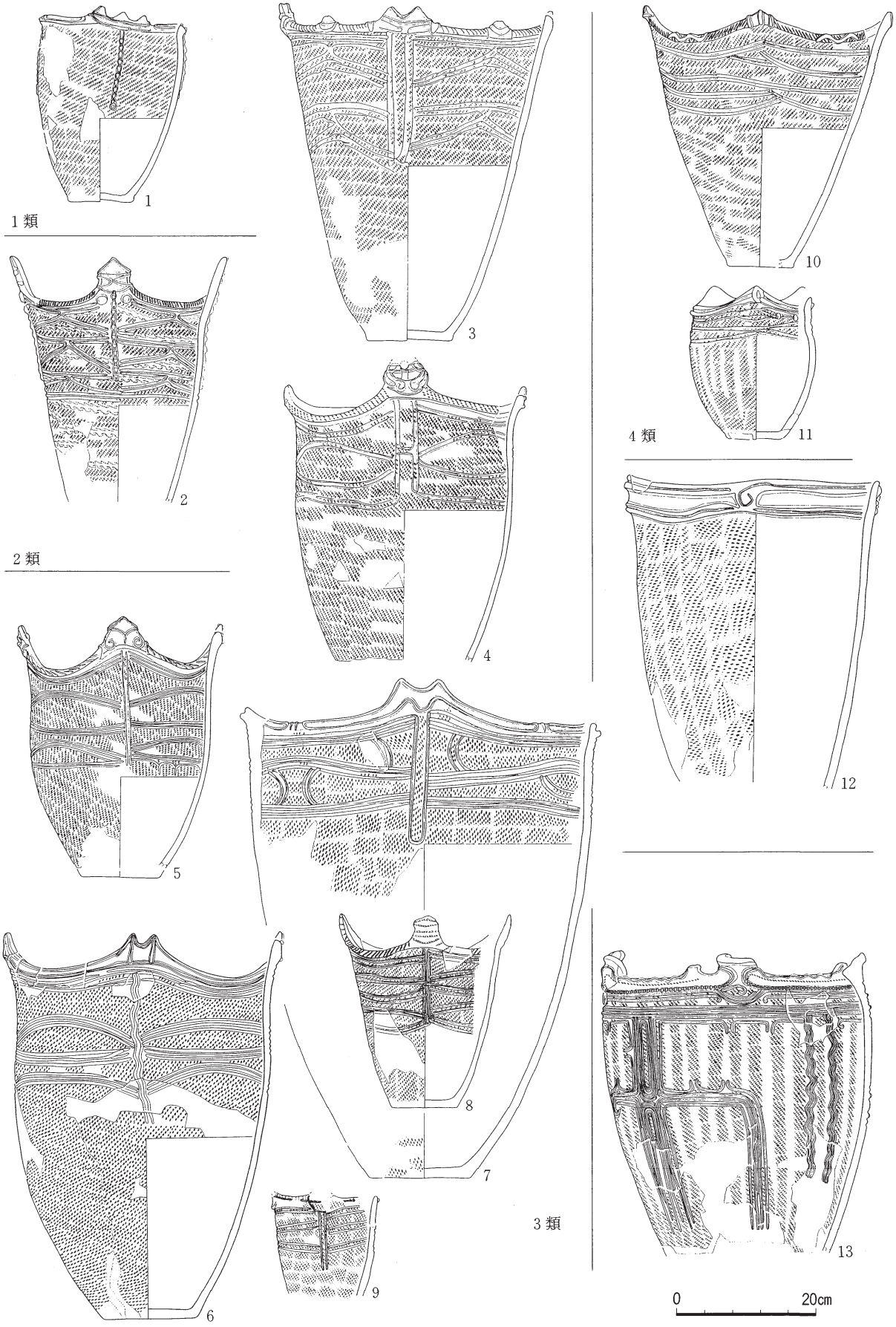


図11　八戸市西長根遺跡出土々器（１）

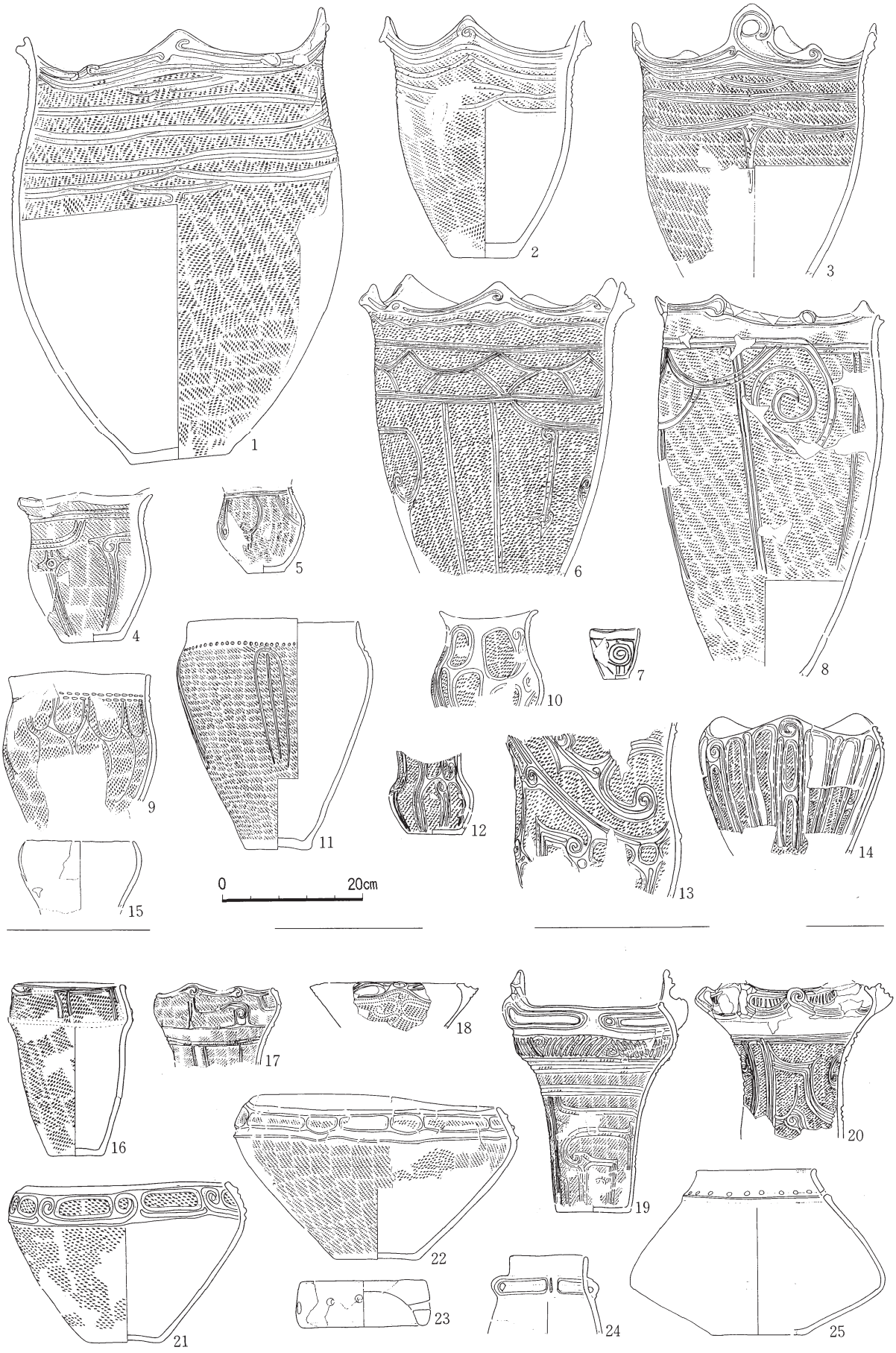


図12　八戸市西長根遺跡出土々器（２）

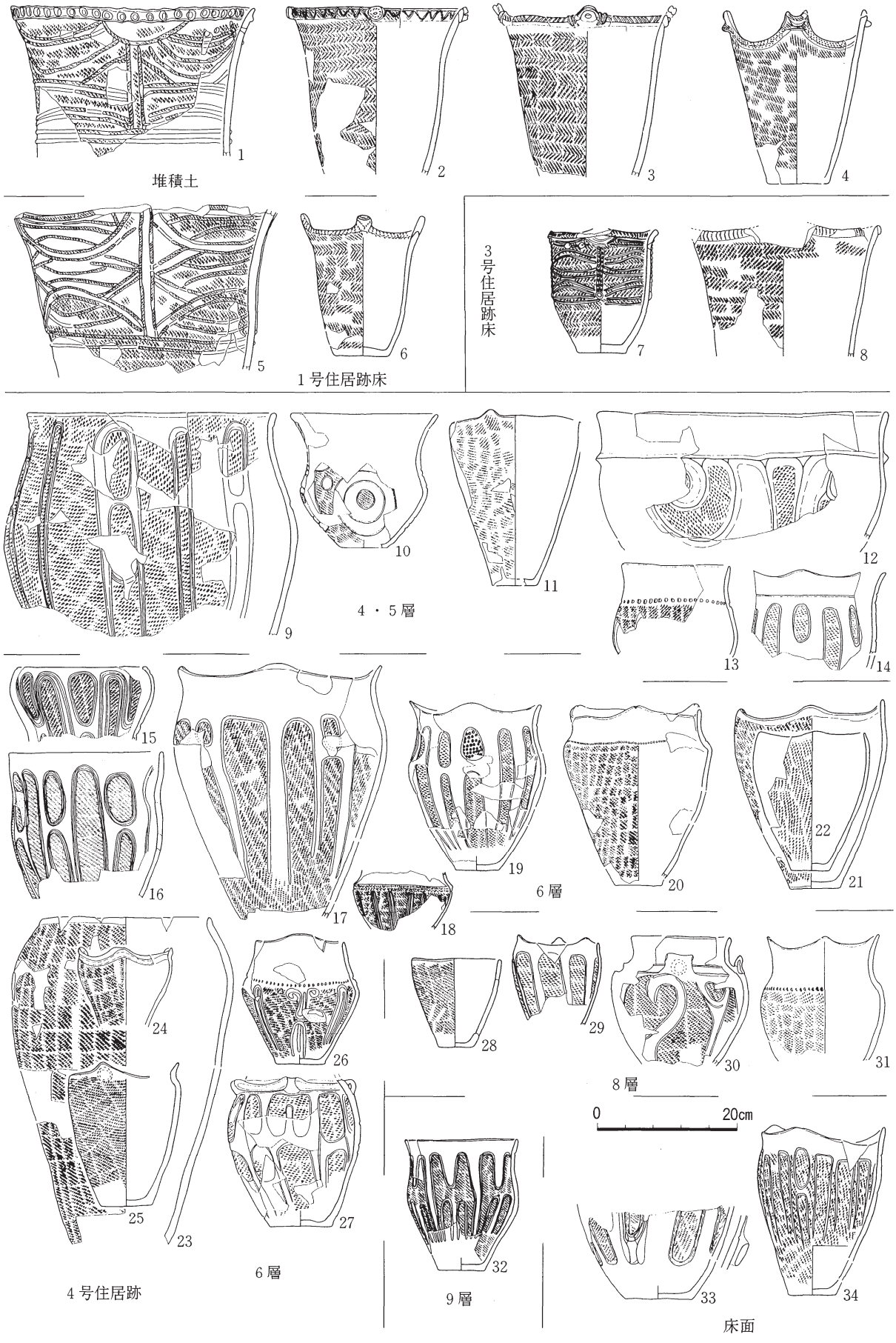


図13 八戸市西長根遺跡出土々器（３．共伴関係）

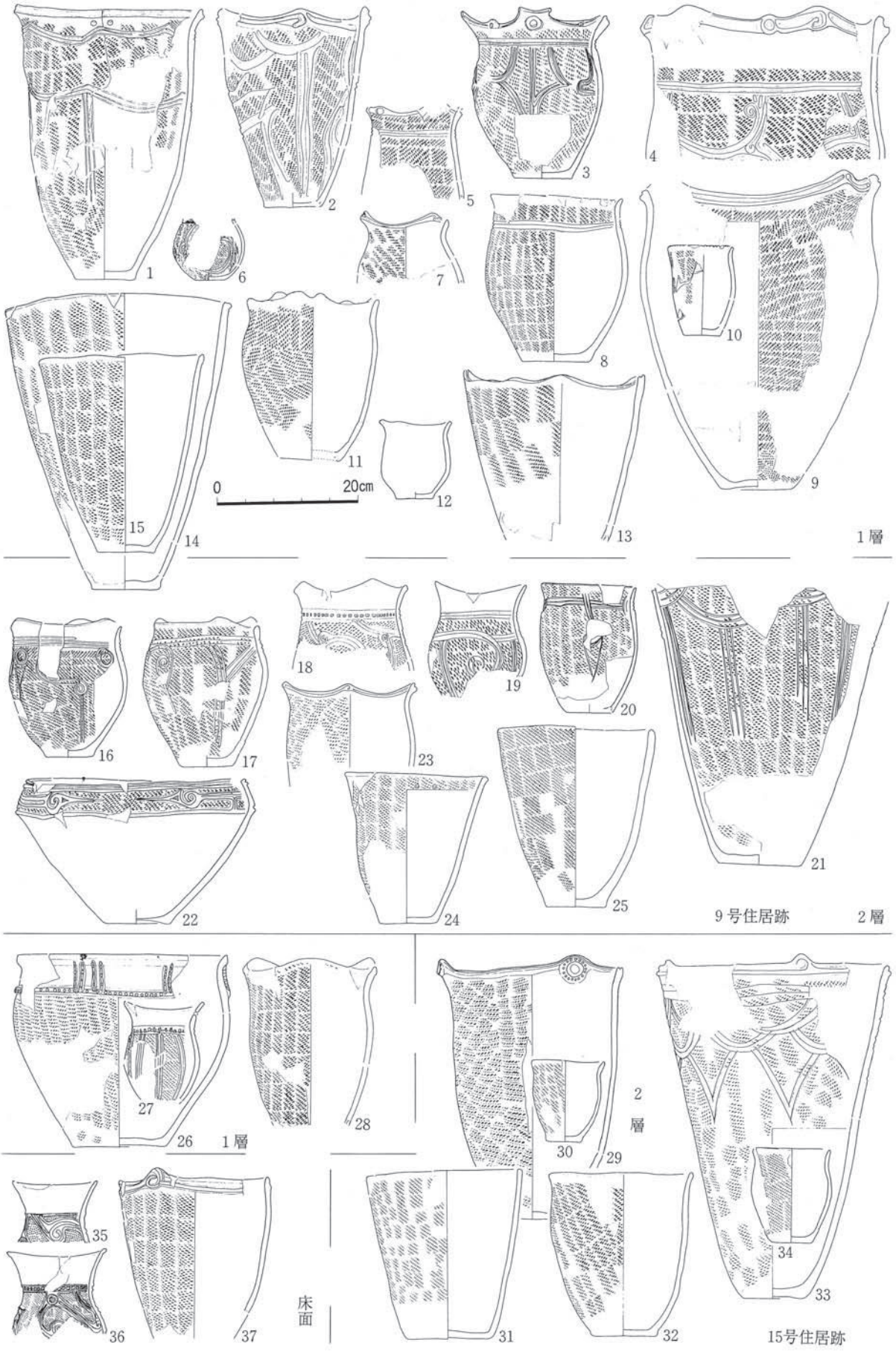


図14　八戸市西長根遺跡出土々器（4．共伴関係）

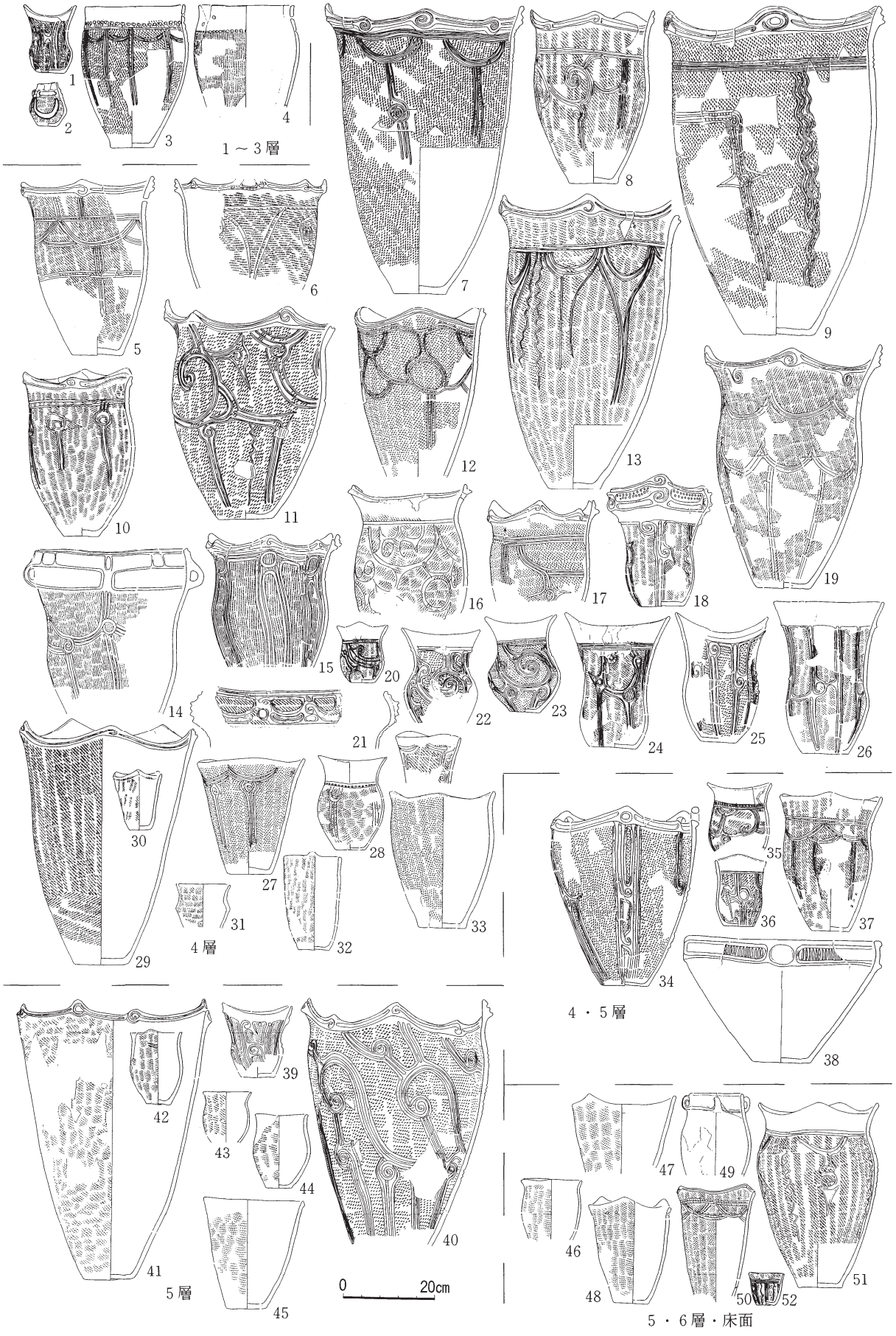


図15　八戸市西長根遺跡10号住居跡出土々器（５．共伴関係）

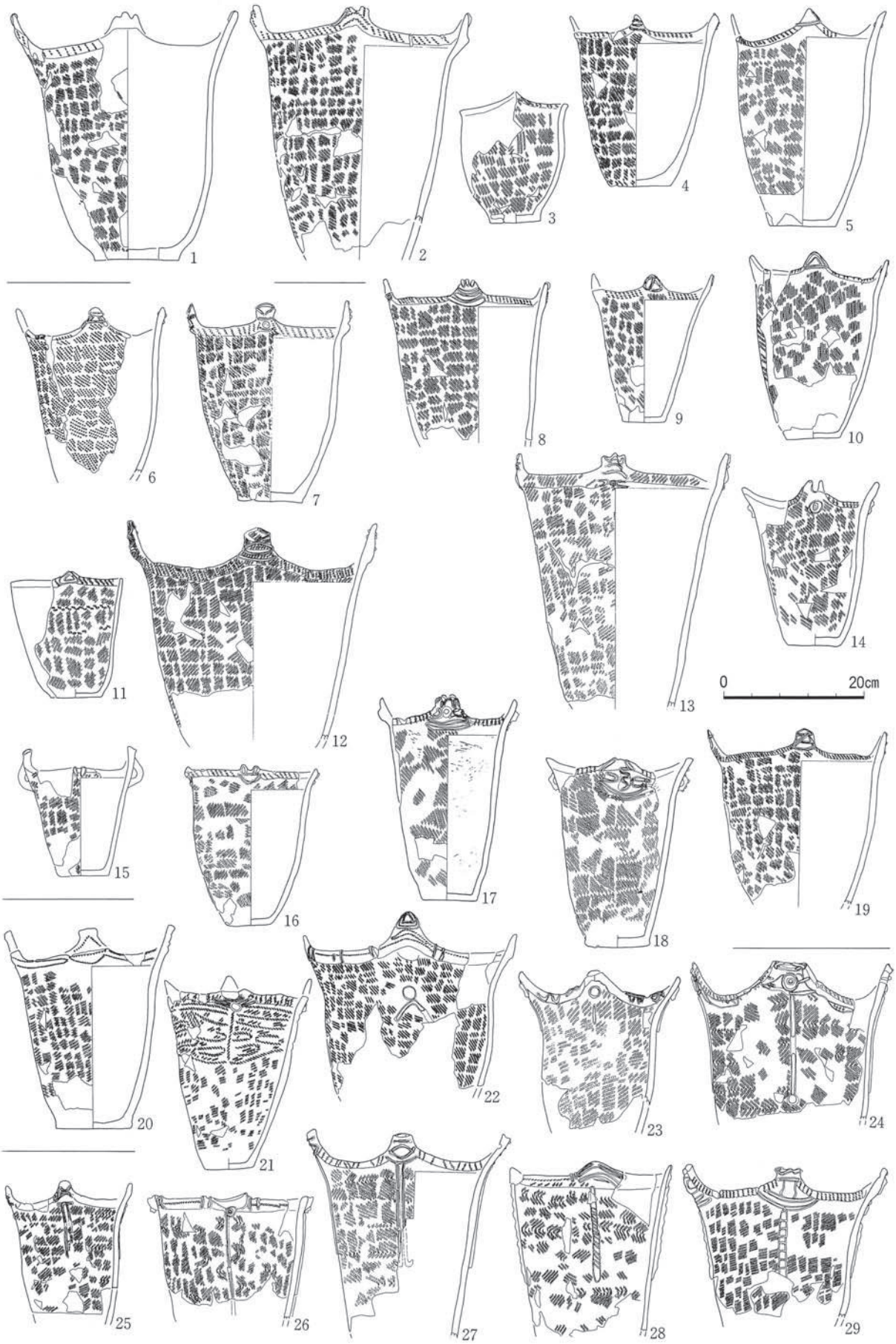


図16　青森県六ケ所村富ノ沢２遺跡出土々器（１）

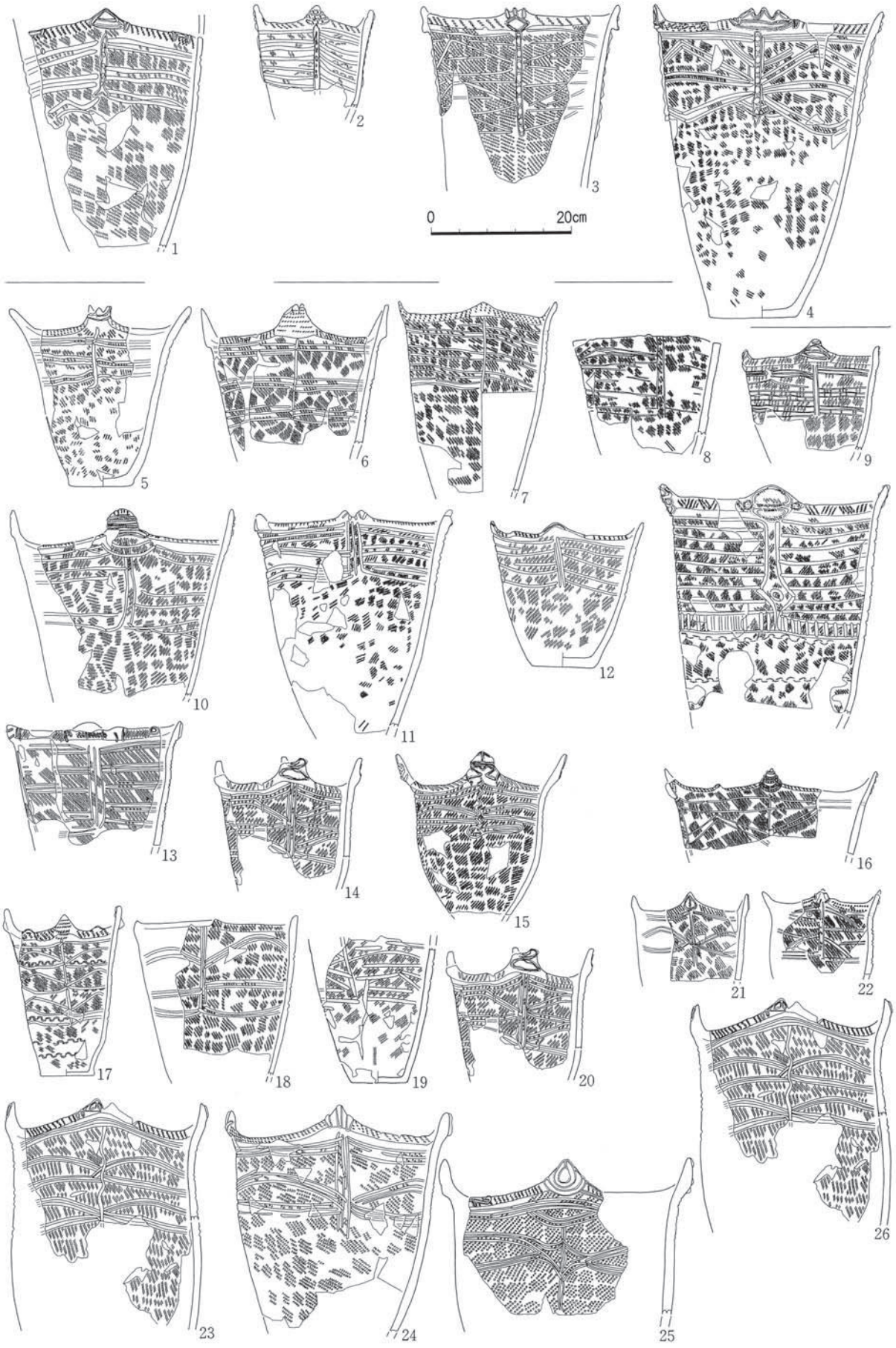


図17　青森県六ケ所村富ノ沢２遺跡出土々器（２）



図18　青森県六ケ所村富ノ沢２遺跡出土々器（３）



図19　青森県六ケ所村富ノ沢２遺跡出土々器（４）

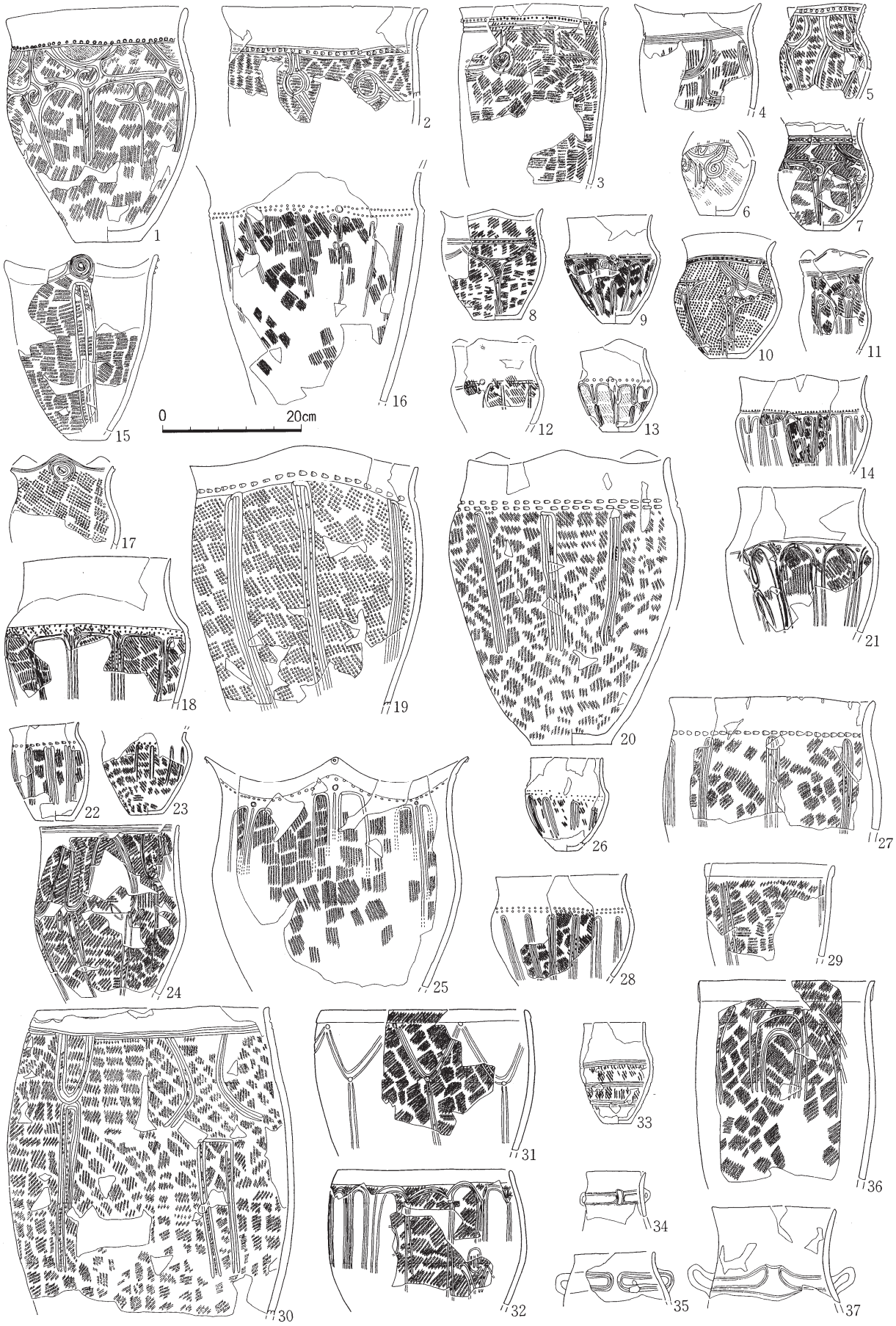


図20　青森県六ケ所村富ノ沢２遺跡出土々器（５）

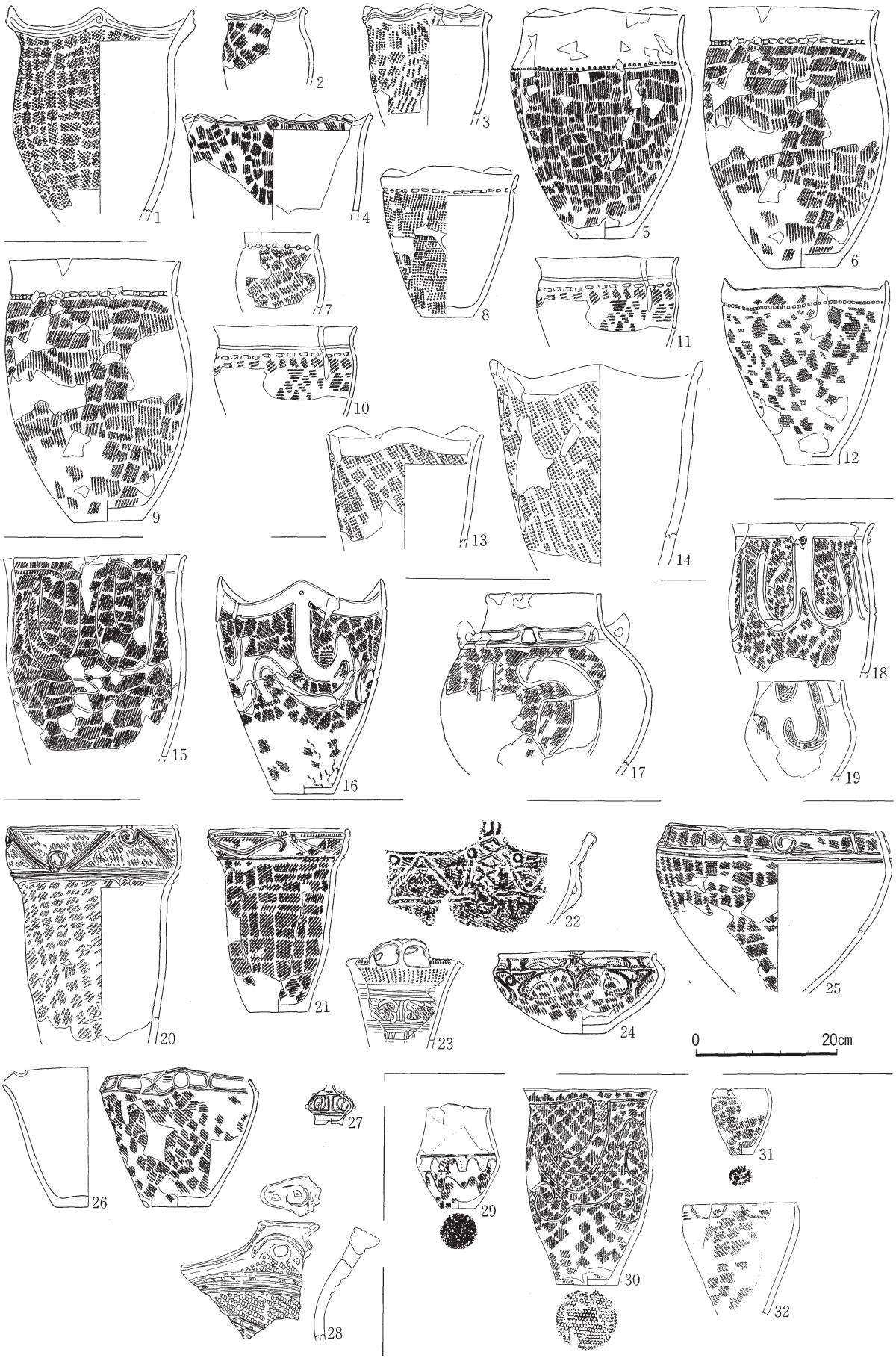


図21　青森県六ケ所村富ノ沢２遺跡出土々器（６）

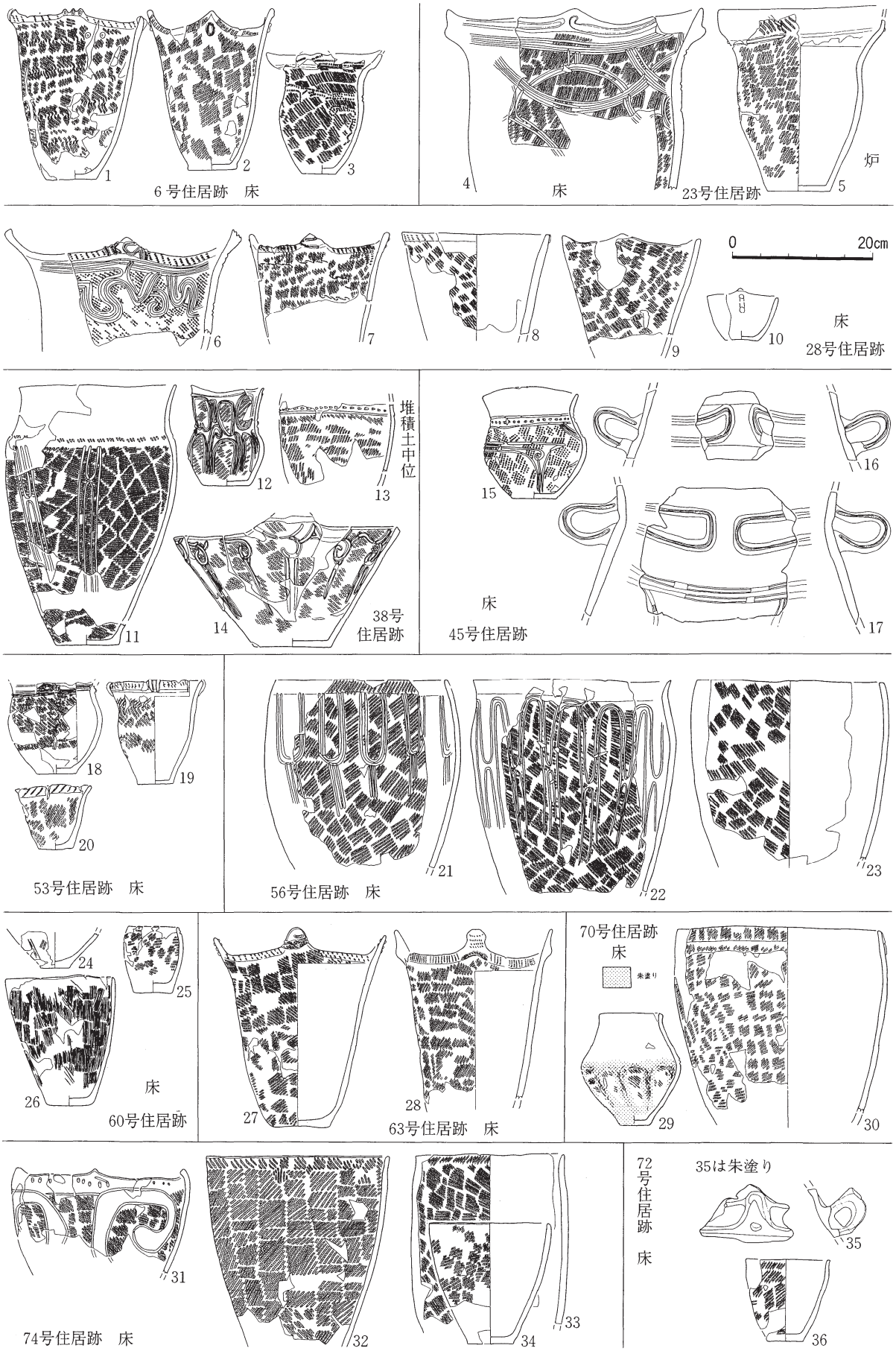


図22　青森県六ケ所村富ノ沢２遺跡出土々器（７．共伴関係）

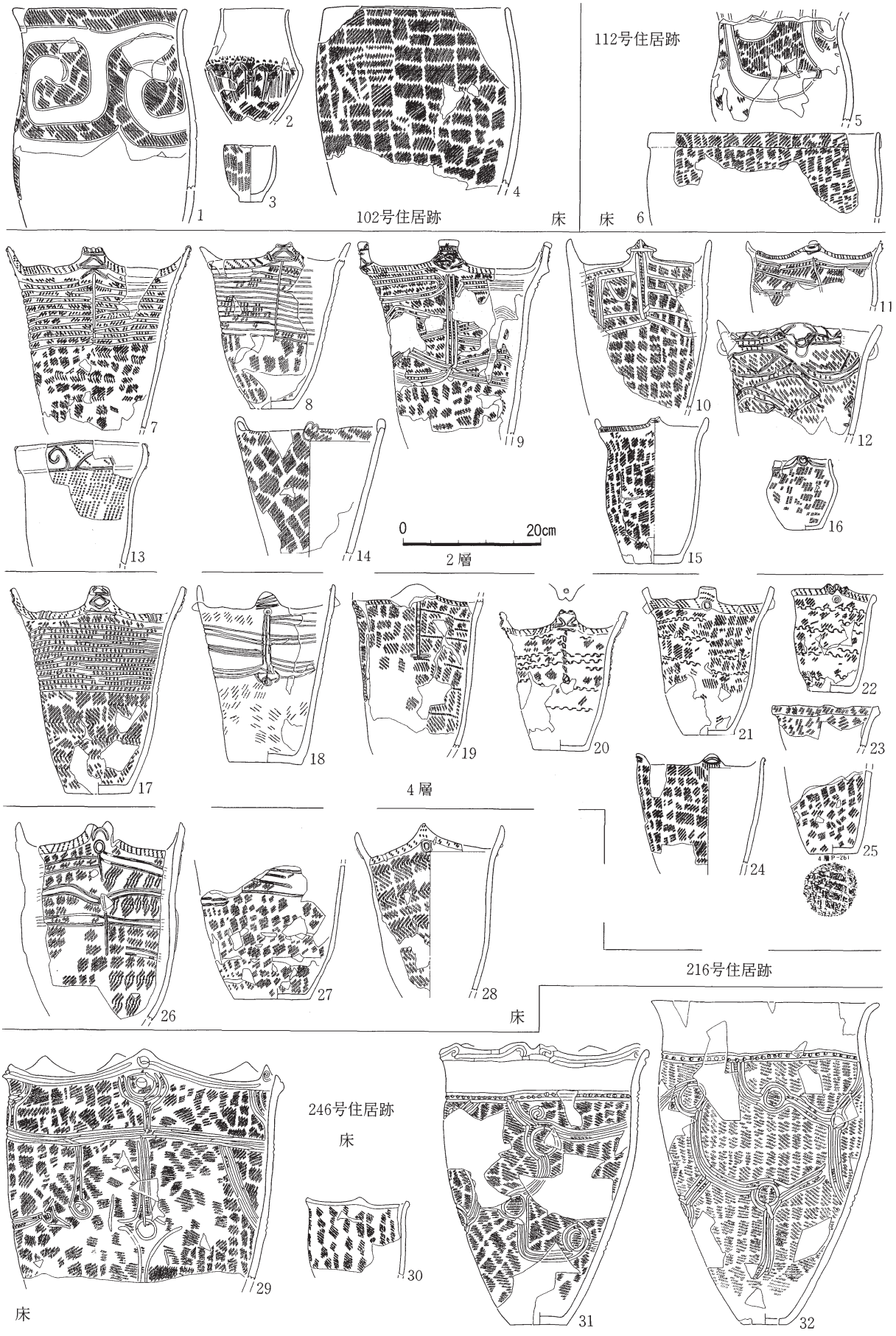


図23　青森県六ケ所村富ノ沢２遺跡出土々器（８．共伴関係）

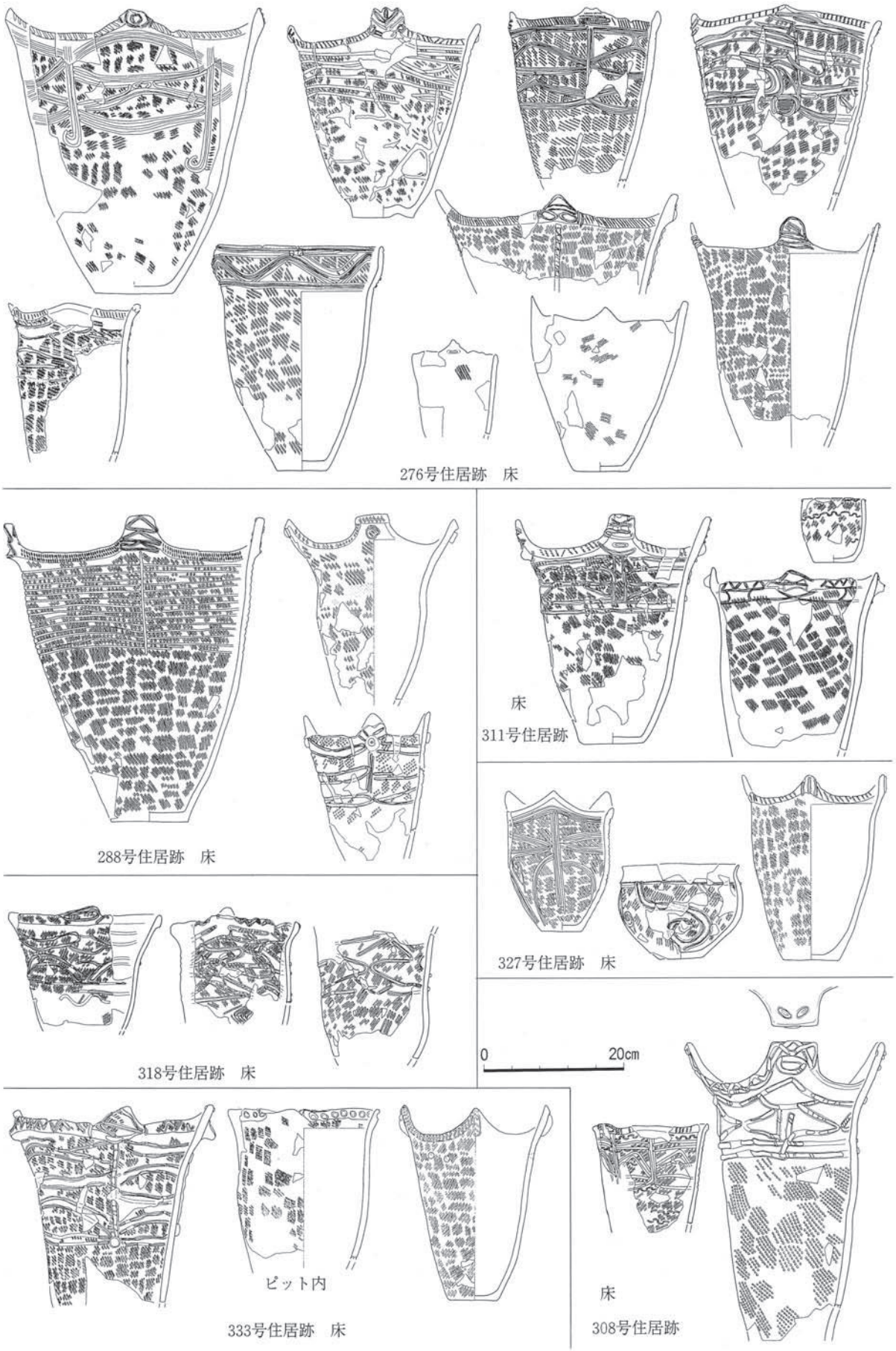


図24　青森県六ケ所村富ノ沢２遺跡出土々器（９．共伴関係）

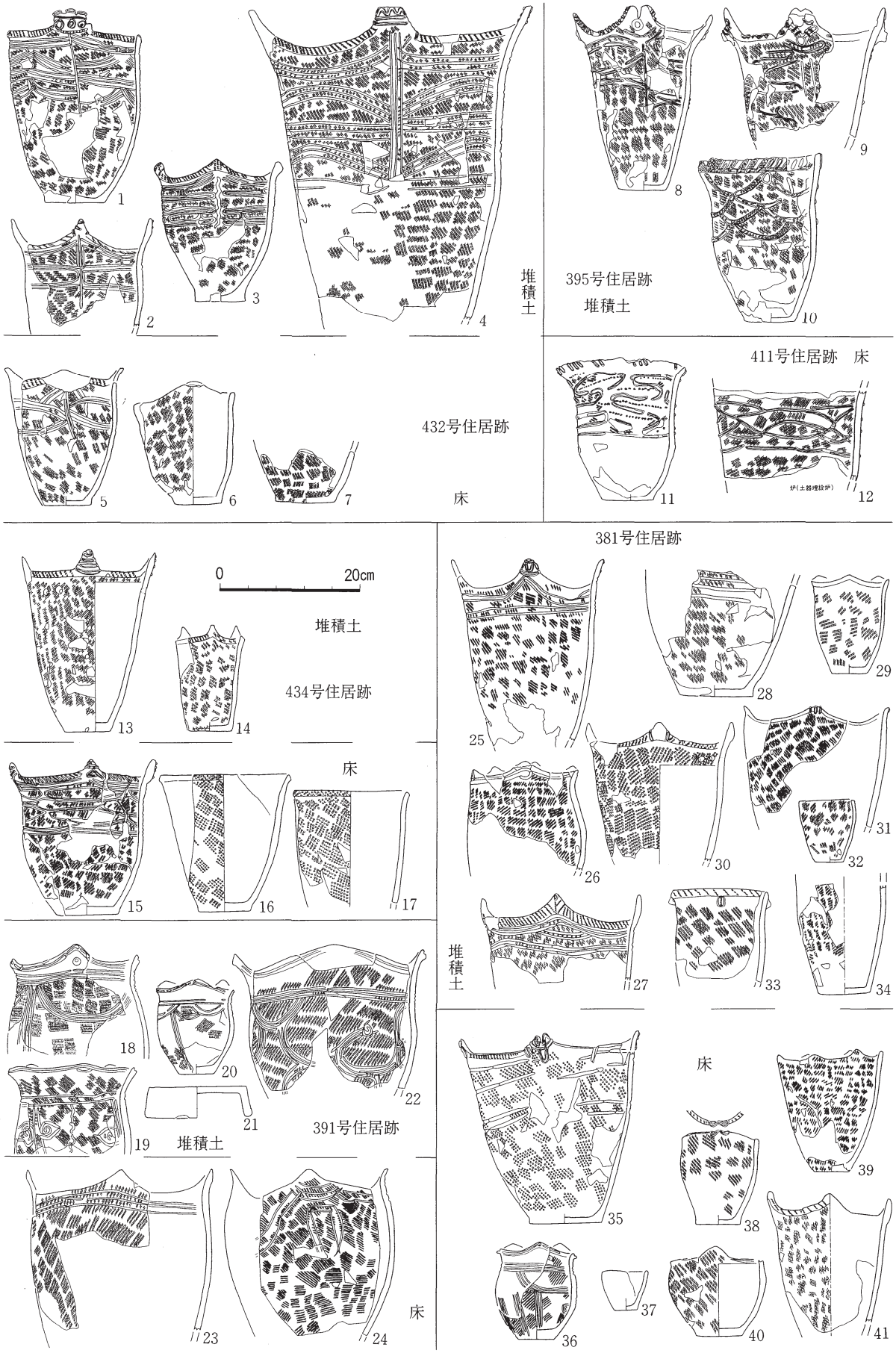


図25 青森県六ケ所村富ノ沢２遺跡出土々器（10．共伴関係）

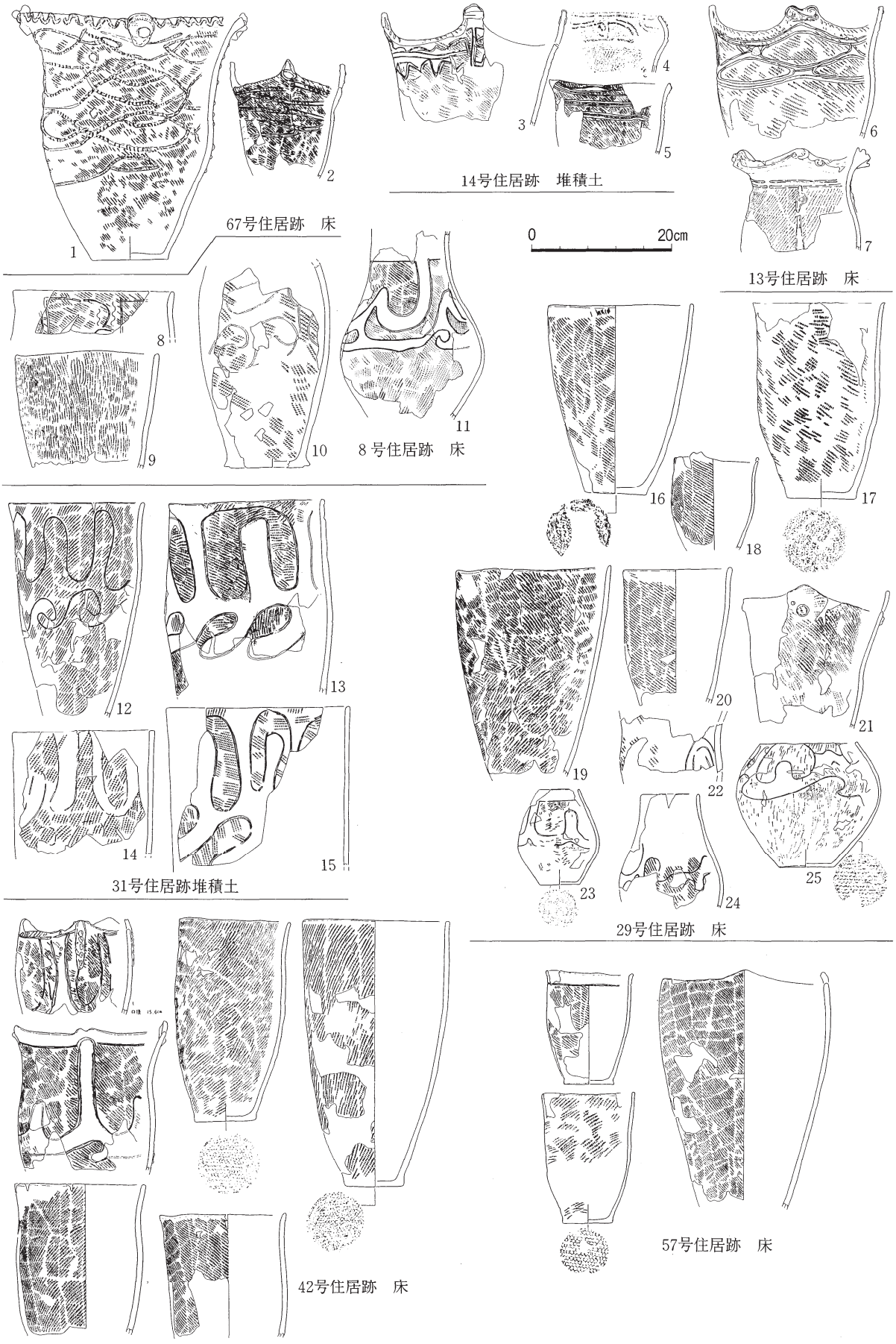


図26　青森県六ケ所村富ノ沢２遺跡出土々器（11．共伴関係）

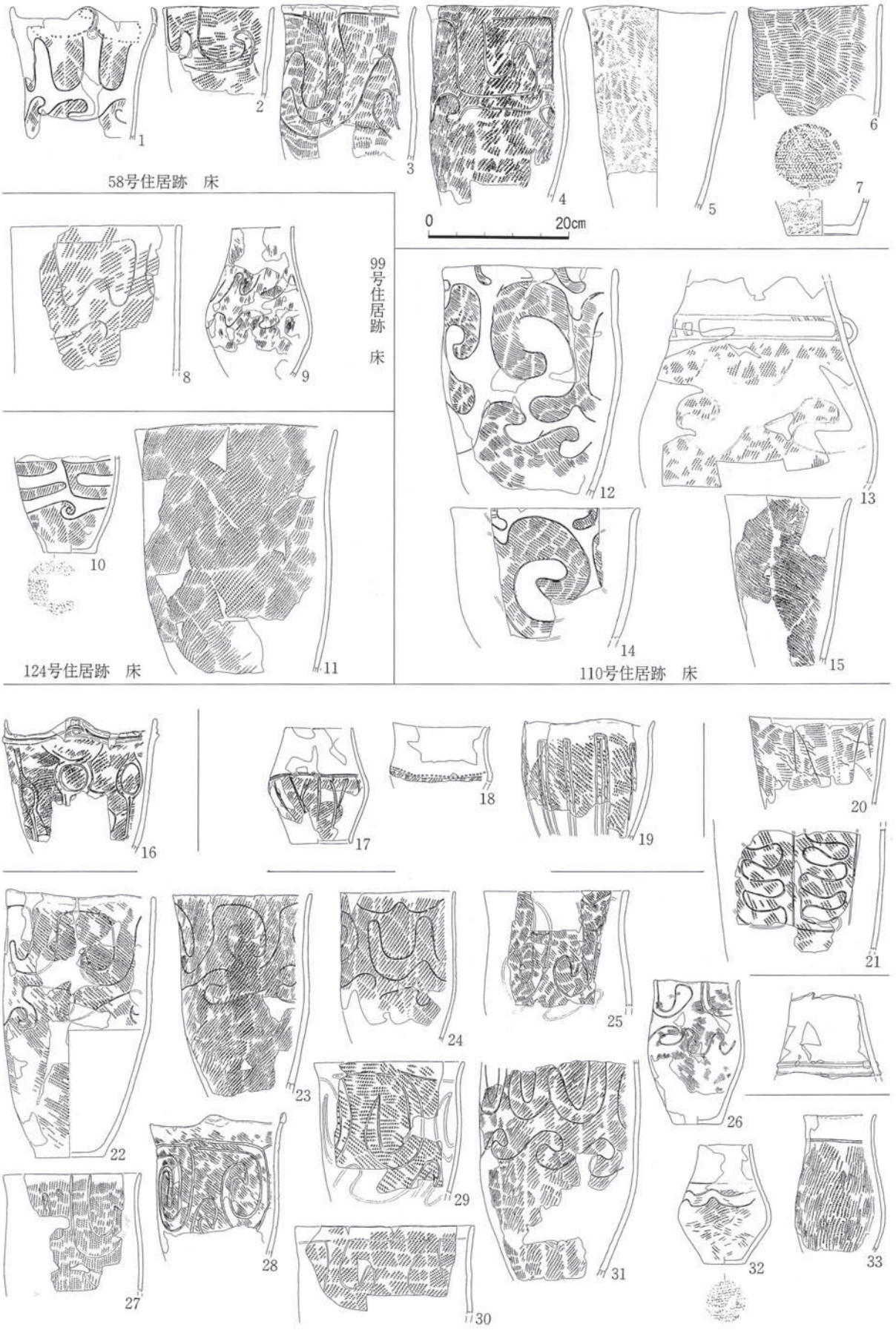
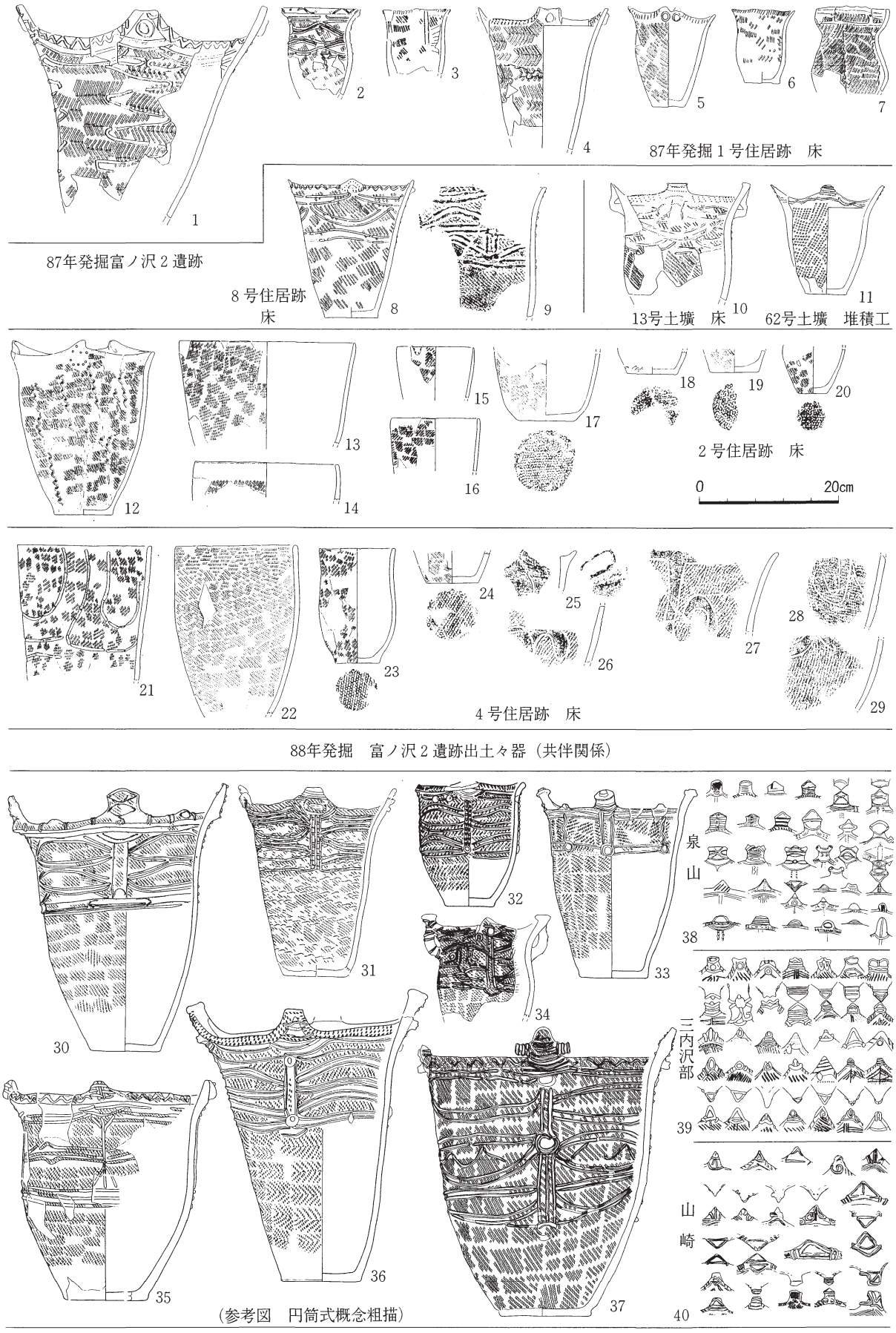
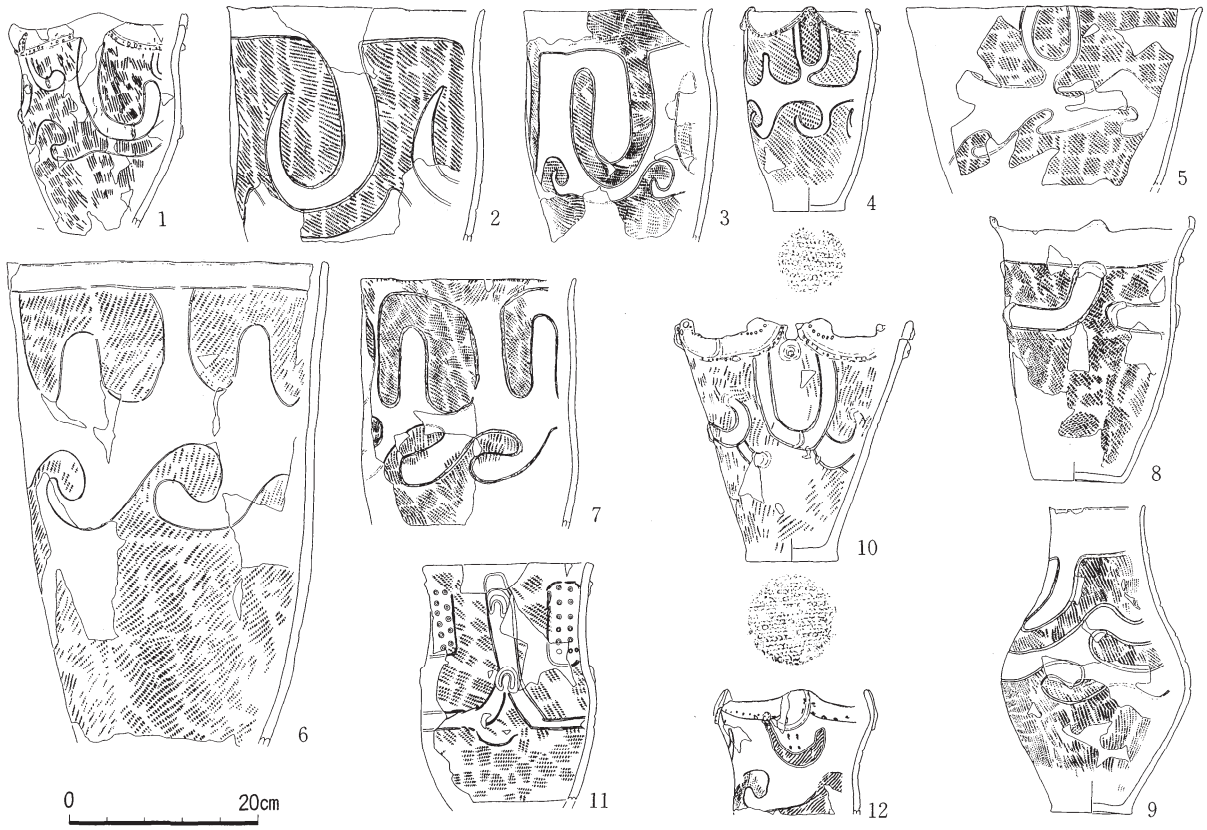


図27　青森県六ケ所村富ノ沢２遺跡出土々器（12．共伴関係）



88年発掘　富ノ沢2遺跡出土々器（共伴関係）

図28　青森県六ケ所村富ノ沢2遺跡（13．共伴関係）外出土々器



青森県六ケ所村富ノ沢２遺跡出土々器（14）

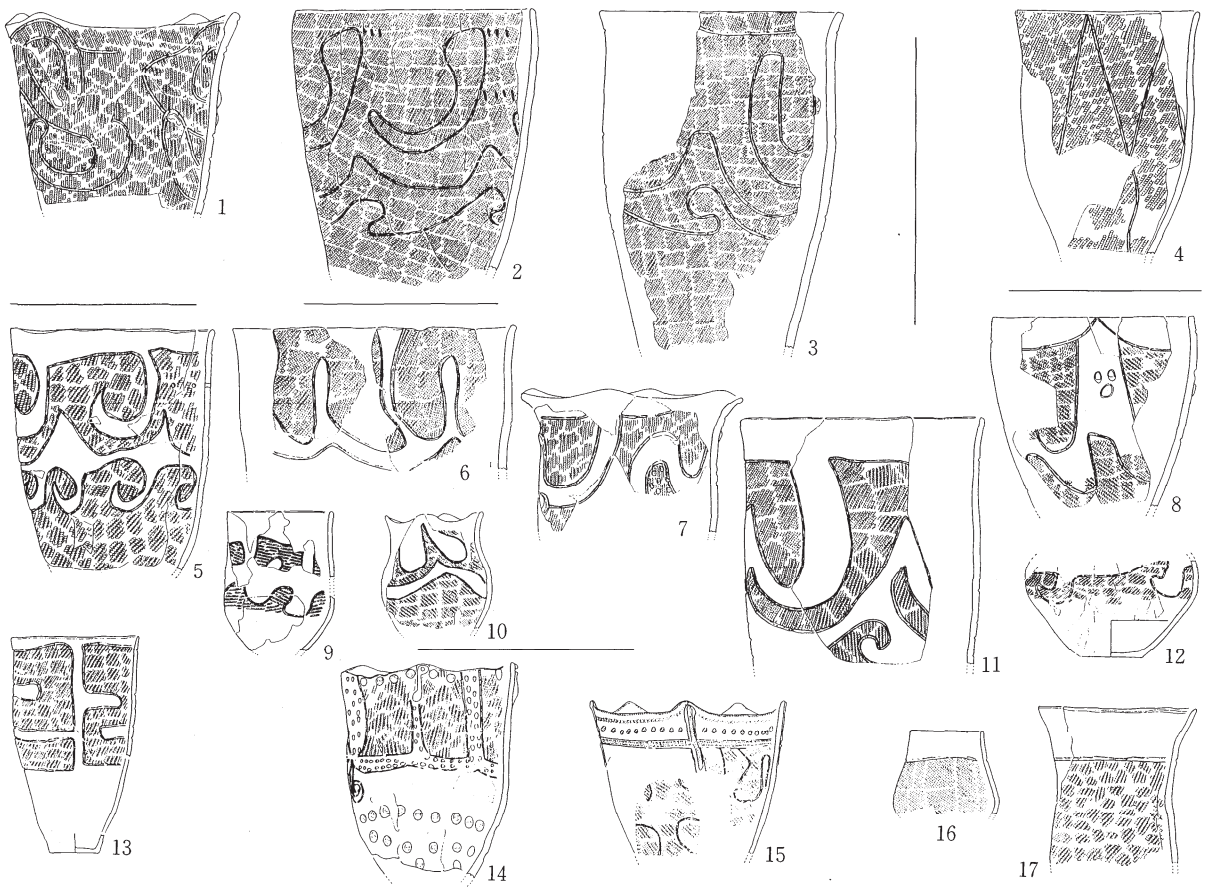


図29　青森県六ケ所村弥栄平遺跡出土々器



図30　青森市三内丸山２遺跡（小三内）出土々器（１）

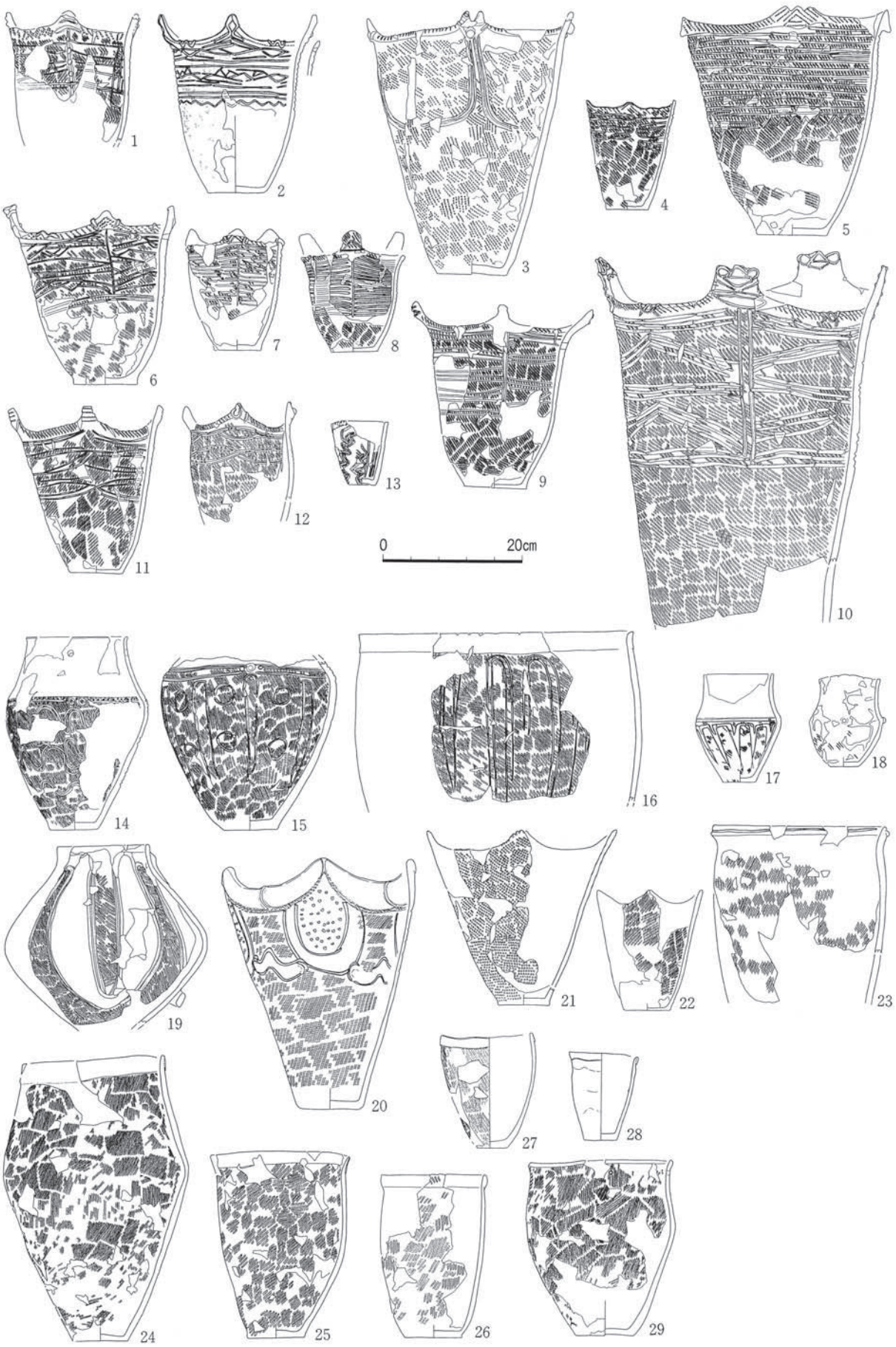


図31　青森市三内丸山２遺跡（小三内）出土々器（２）

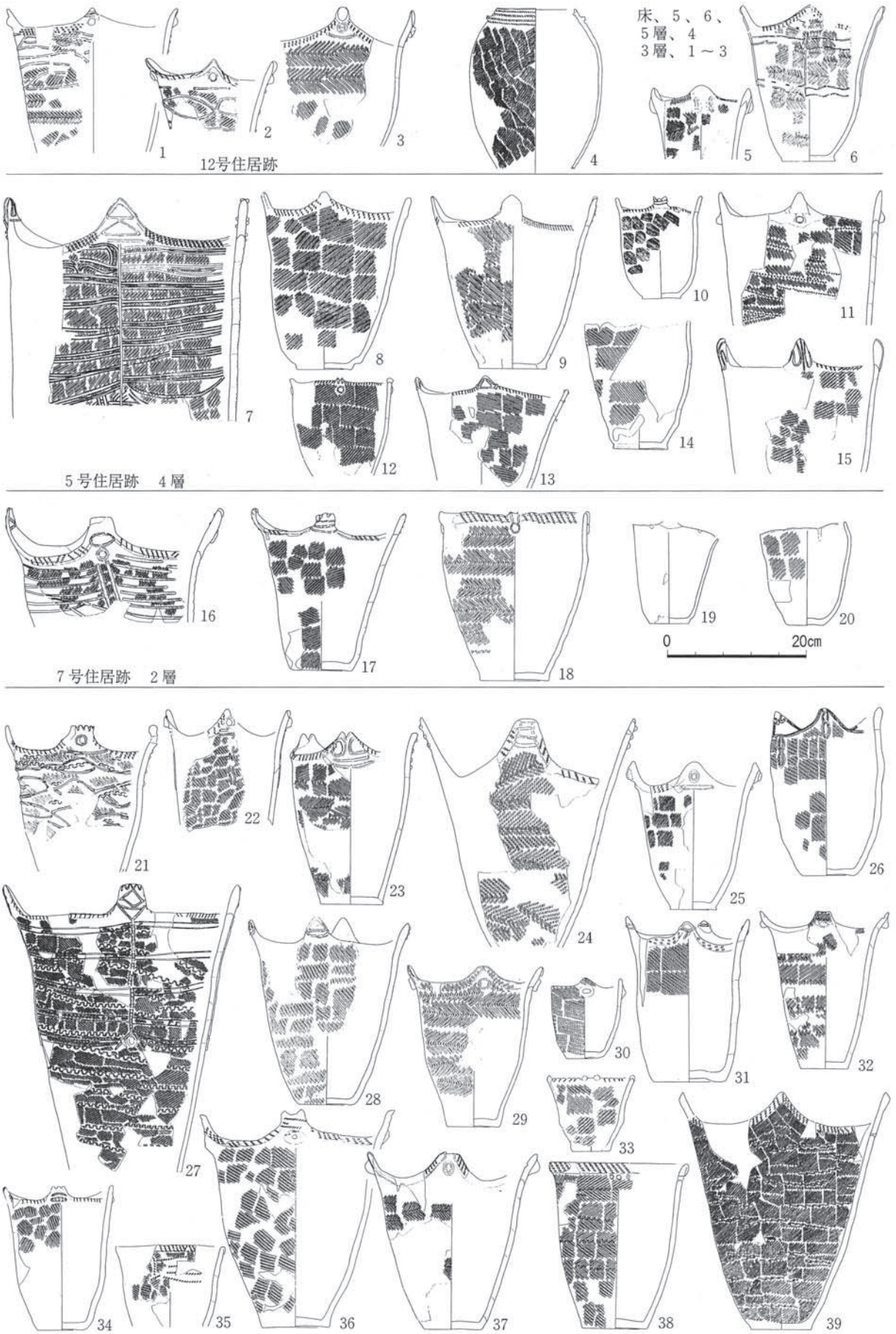
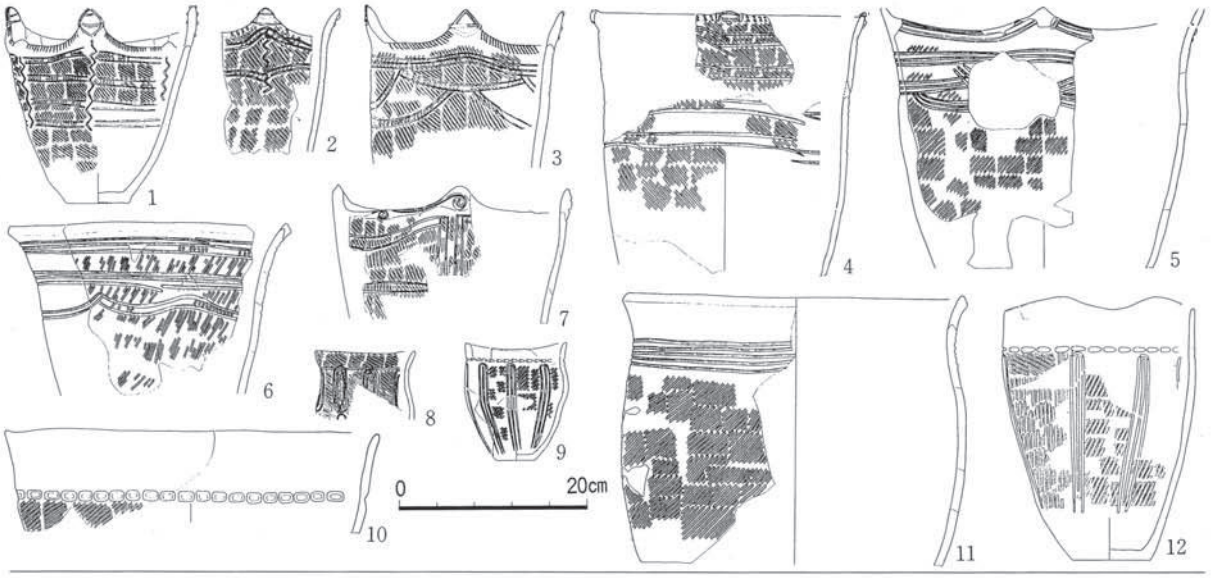


図32　青森市近野遺跡出土々器（1）



青森市近野遺跡出土々器（２）

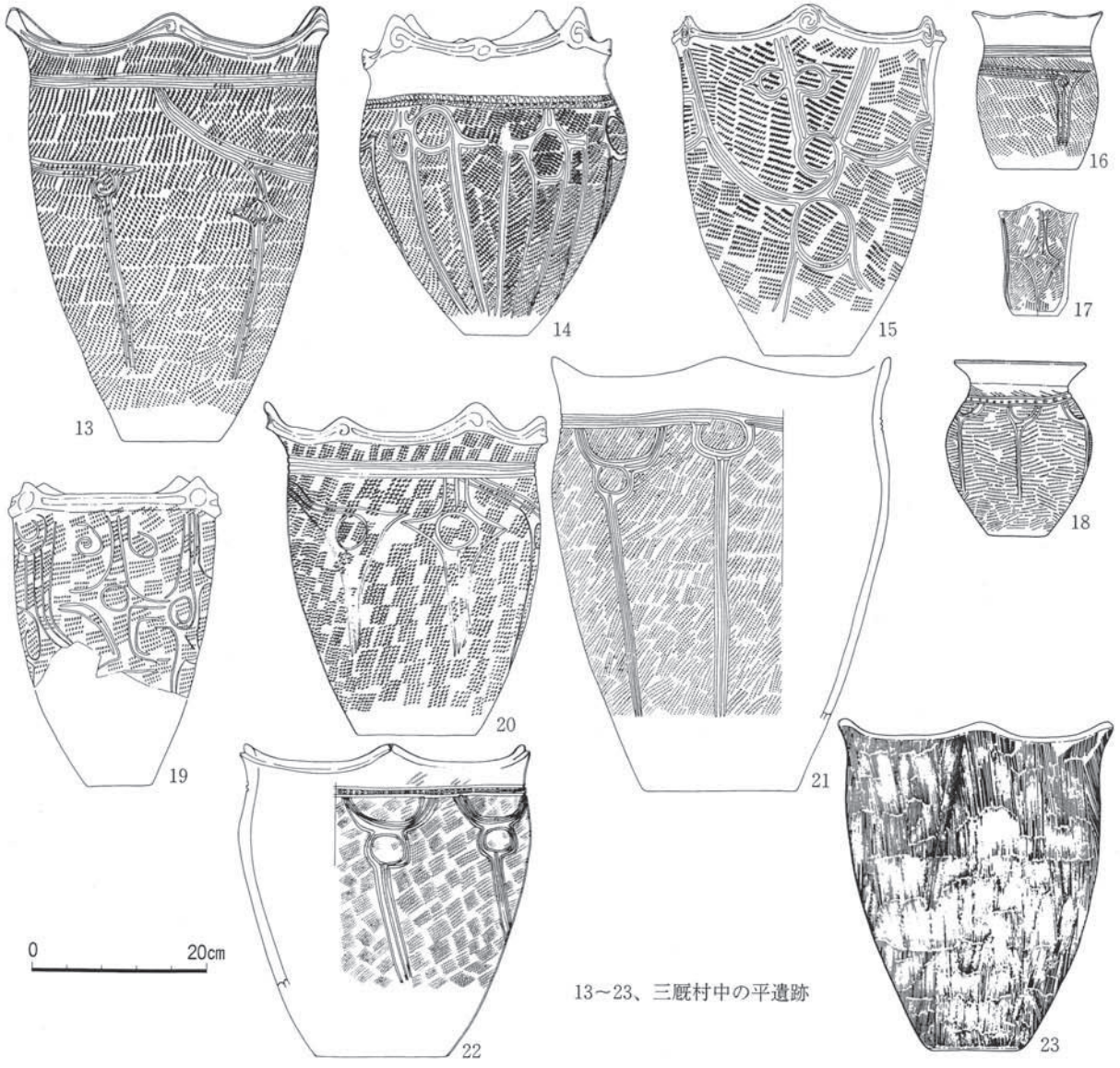


図33　青森市近野遺跡、青森県三厩村中の平遺跡出土々器

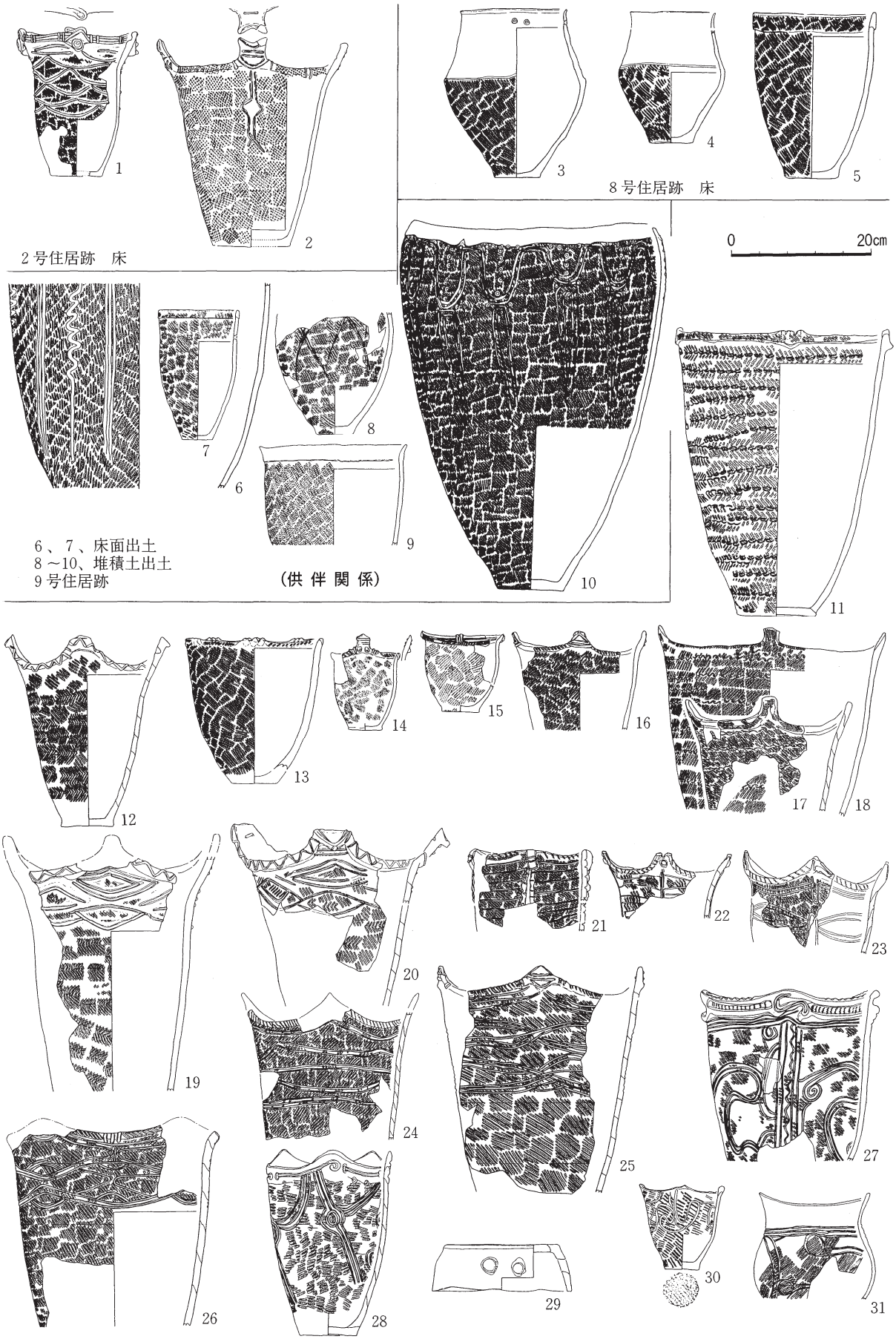
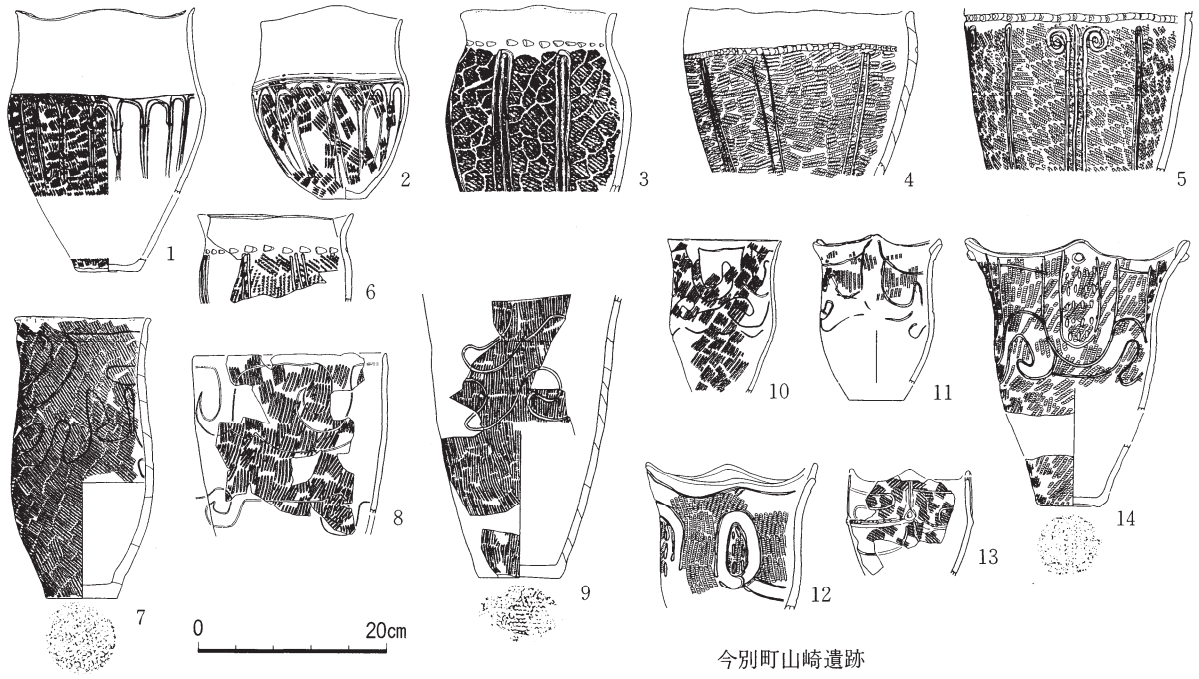
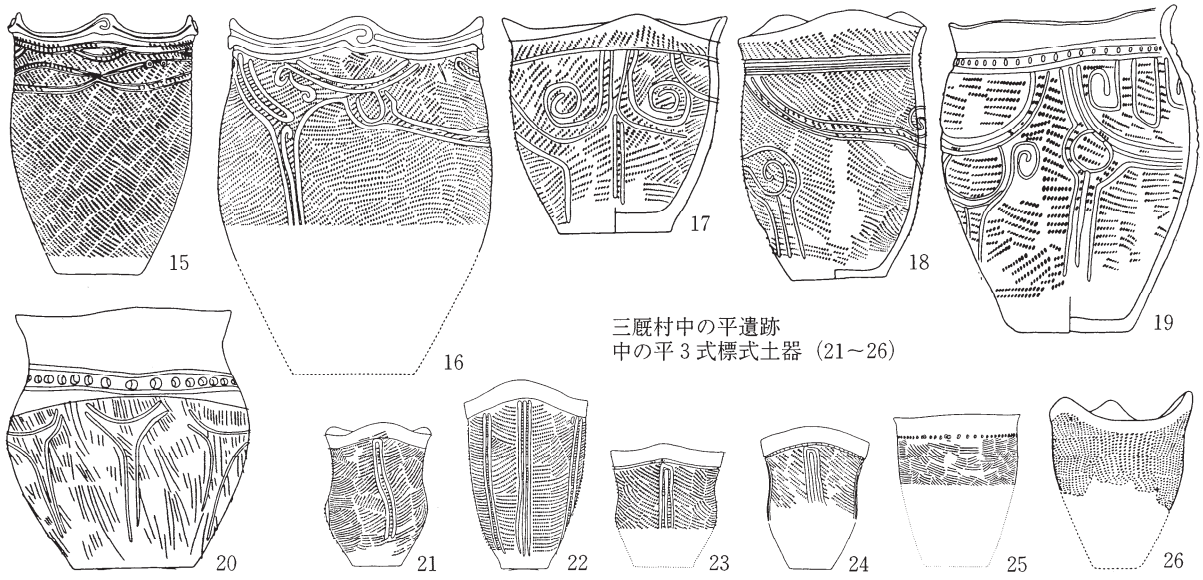


図34　青森県今別町山崎遺跡出土々器





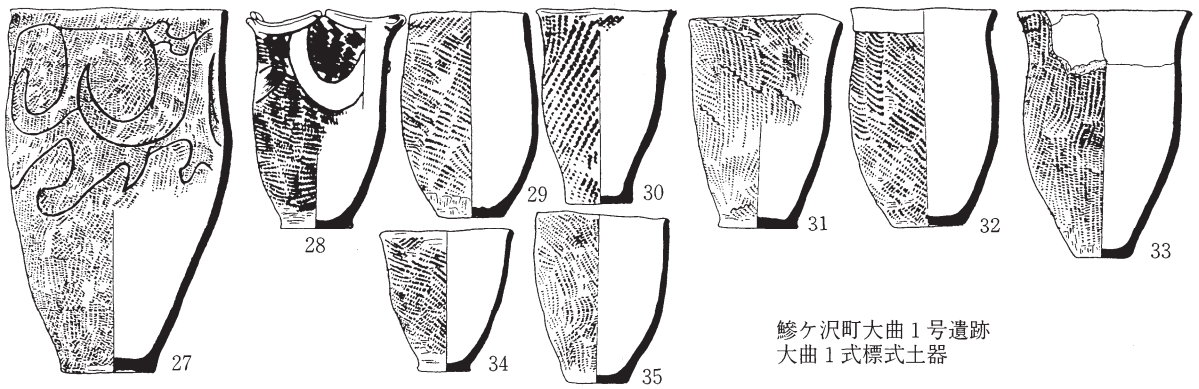
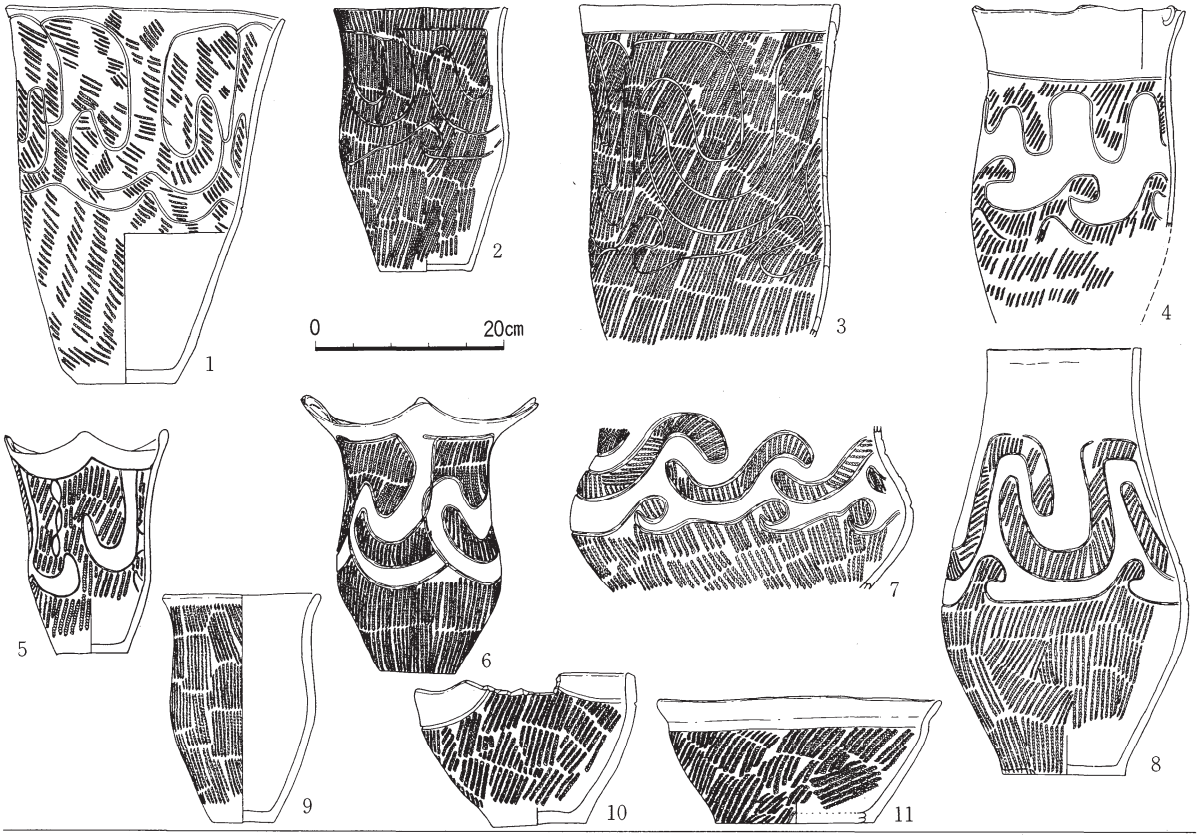
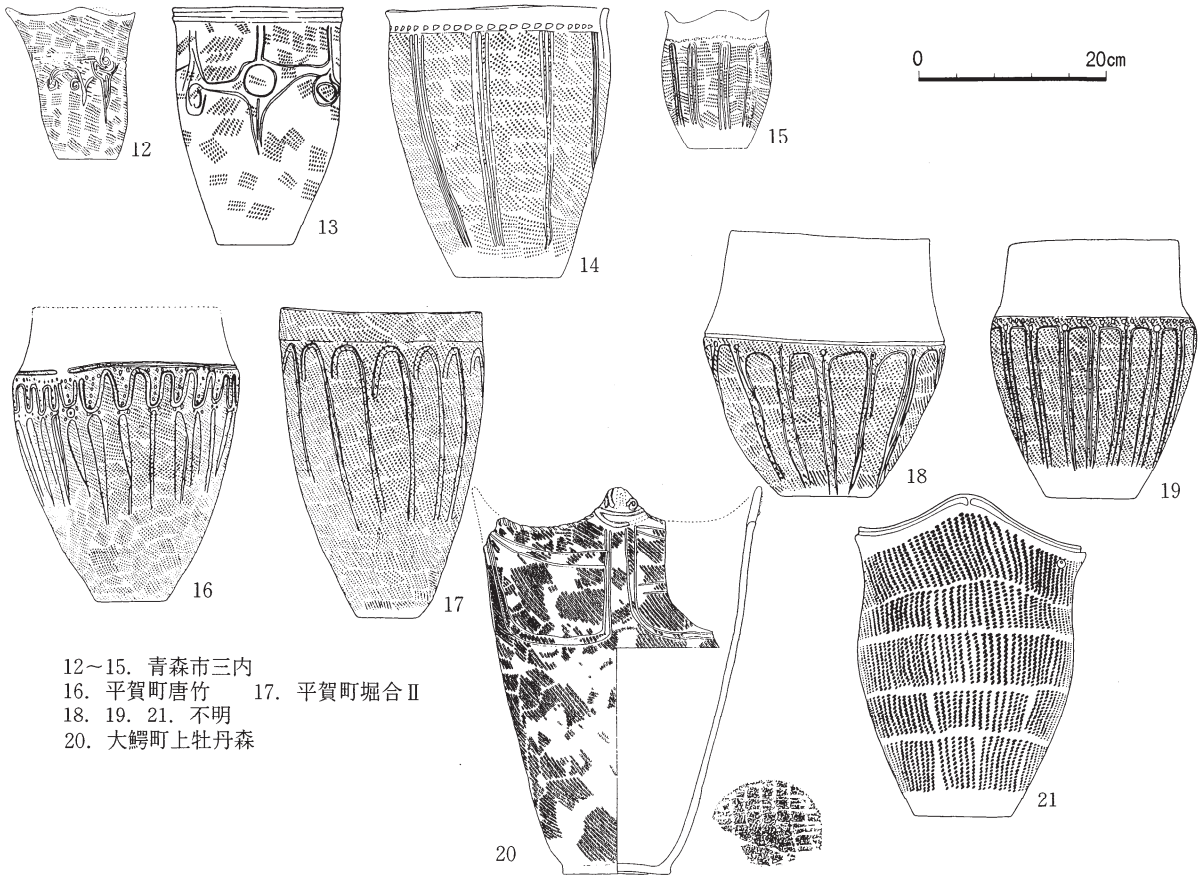


図35　青森県鰺ケ沢町大曲１号遺跡出土々器



青森県平賀町井沢遺跡出土々器



12～15. 青森市三内
16. 平賀町唐竹　　17. 平賀町堀合Ⅱ
18. 19. 21. 不明
20. 大鰐町上牡丹森

図36　青森県平賀町井沢遺跡、外出土々器

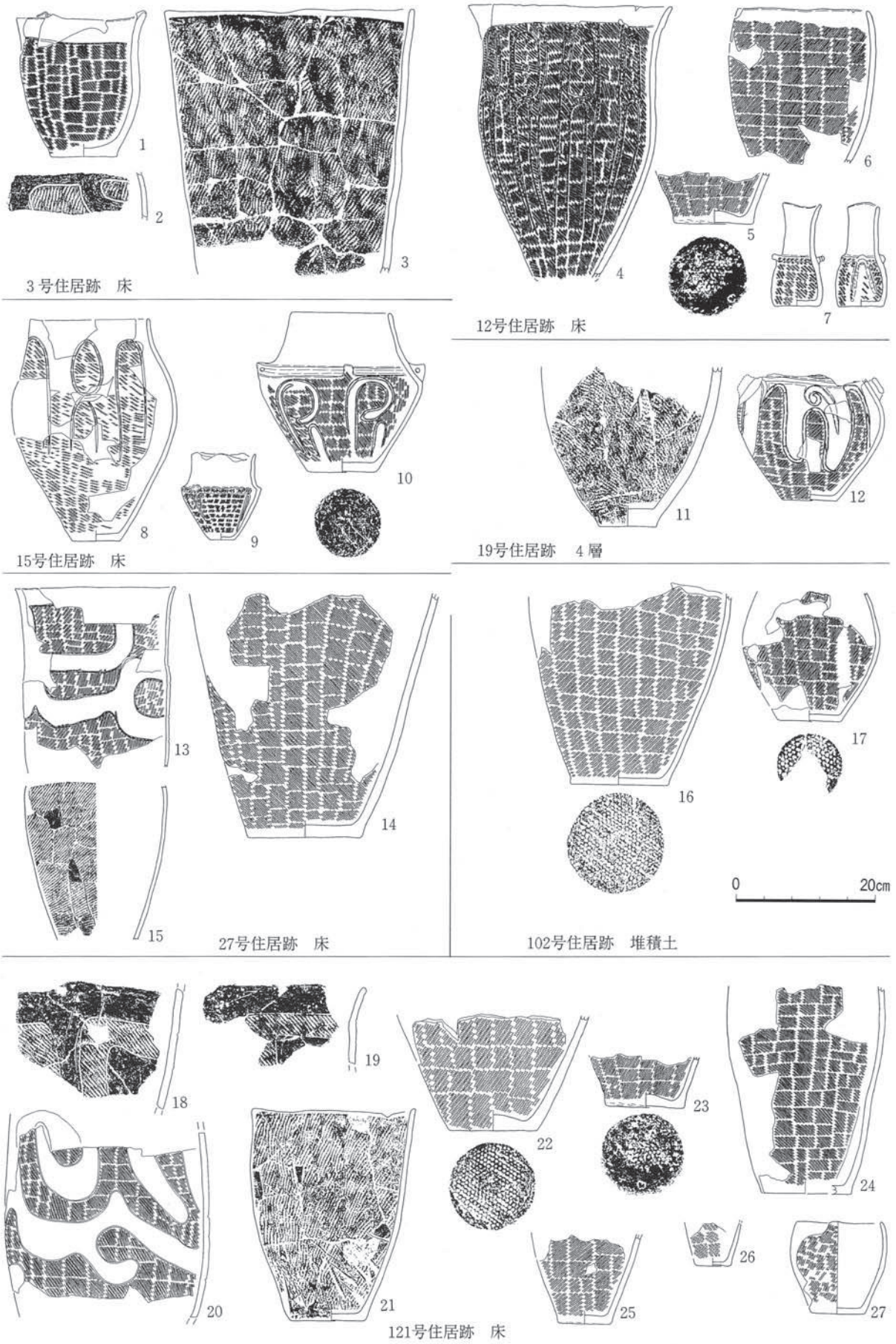


図37　青森県階上町野場５遺跡出土々器（１．共伴関係）

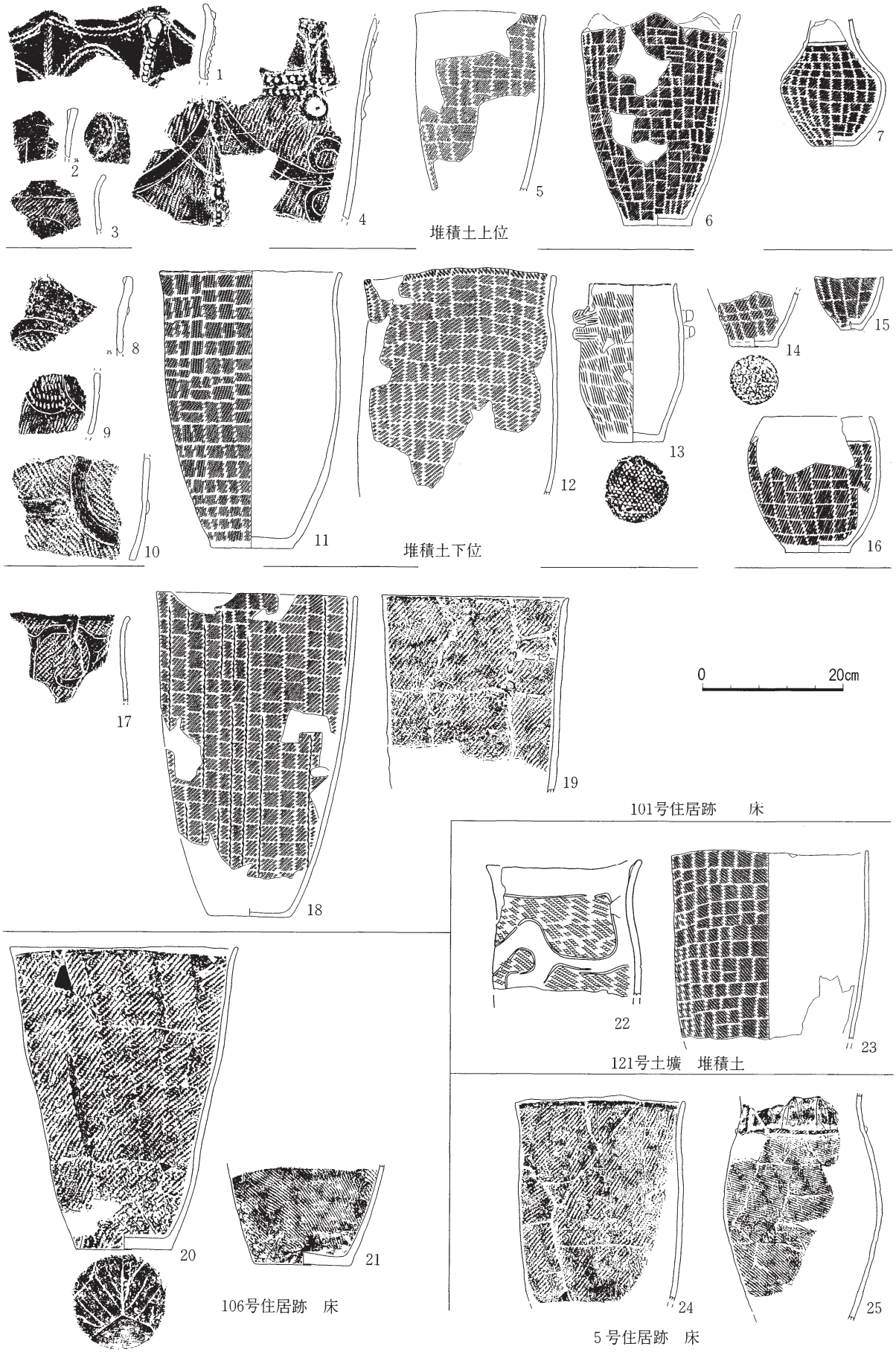
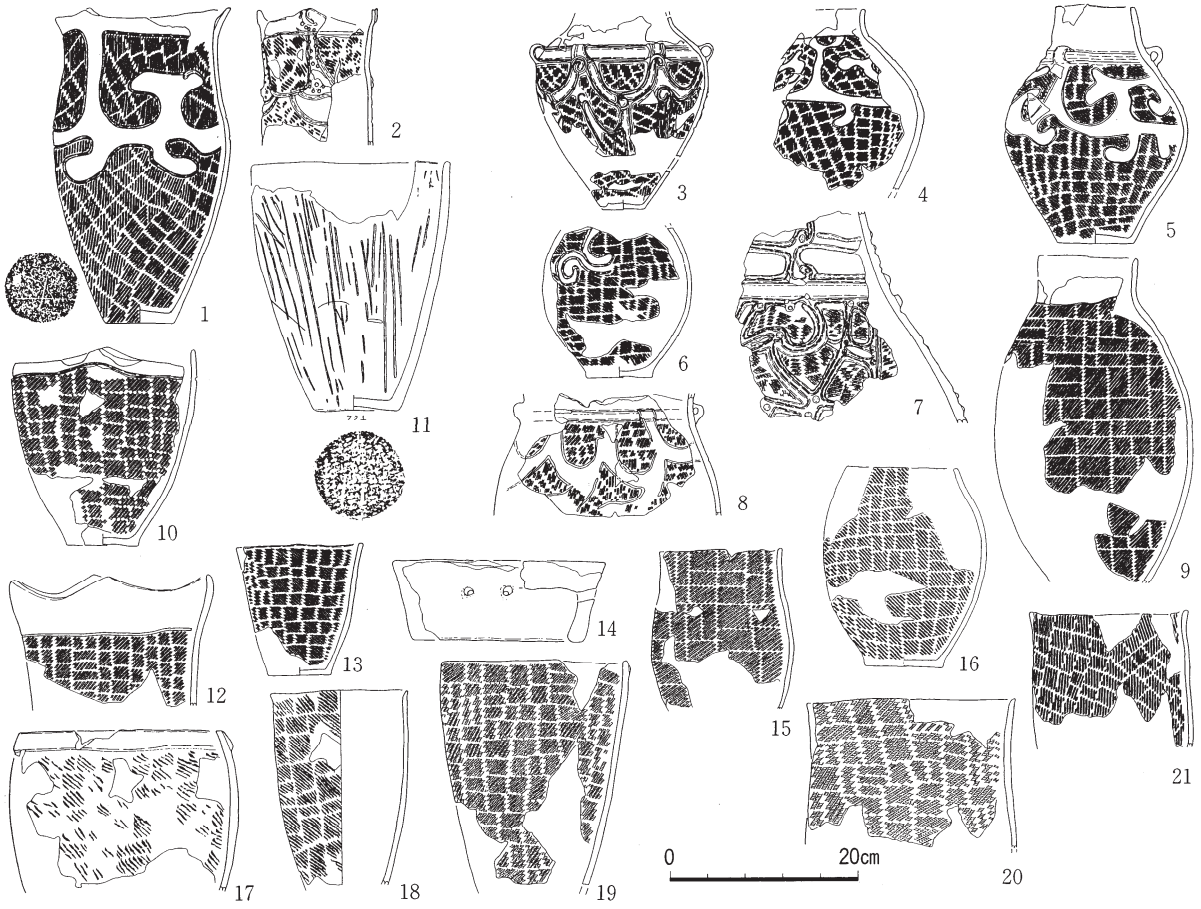
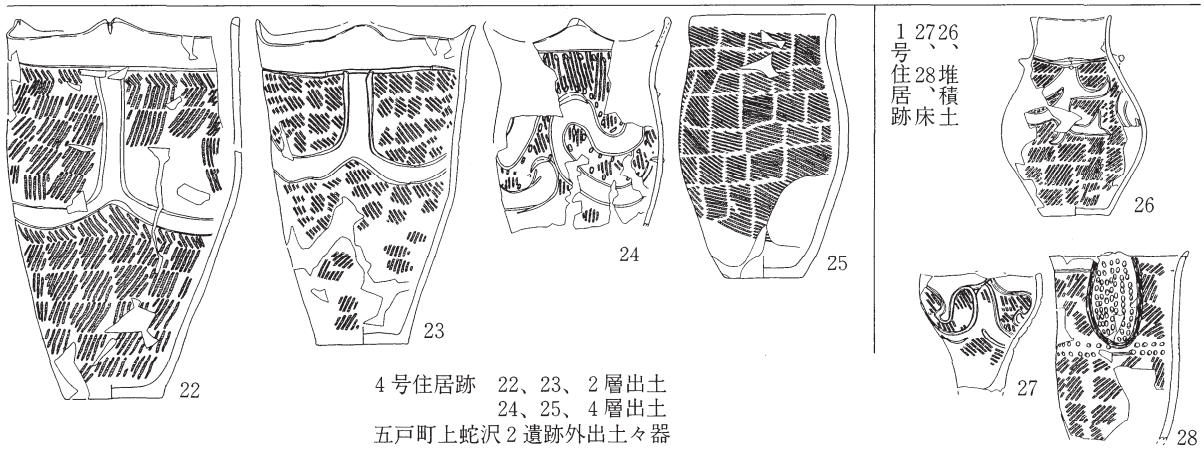


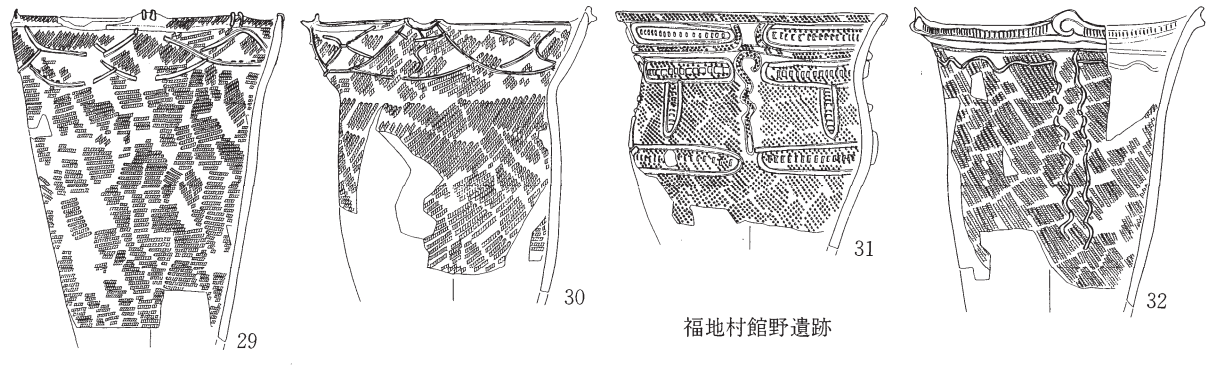
図38　青森県階上町野場５遺跡出土々器（２．共伴関係）



青森県階上町野場５遺跡外出土々器



４号住居跡　22、23、２層出土
24、25、４層出土
五戸町上蛇沢２遺跡外出土々器



福地村館野遺跡

図39　青森県階上町野場５遺跡、外出土々器

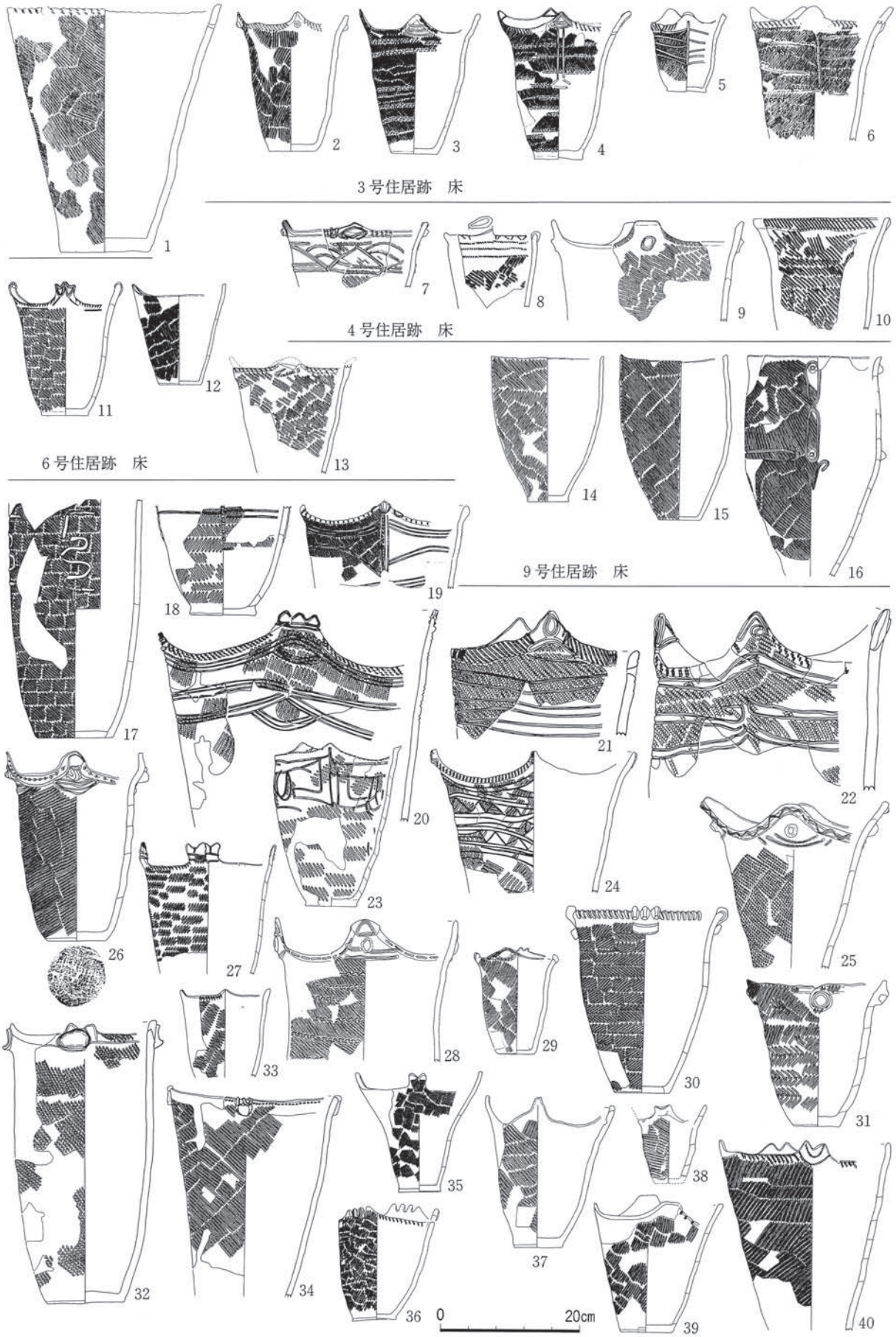
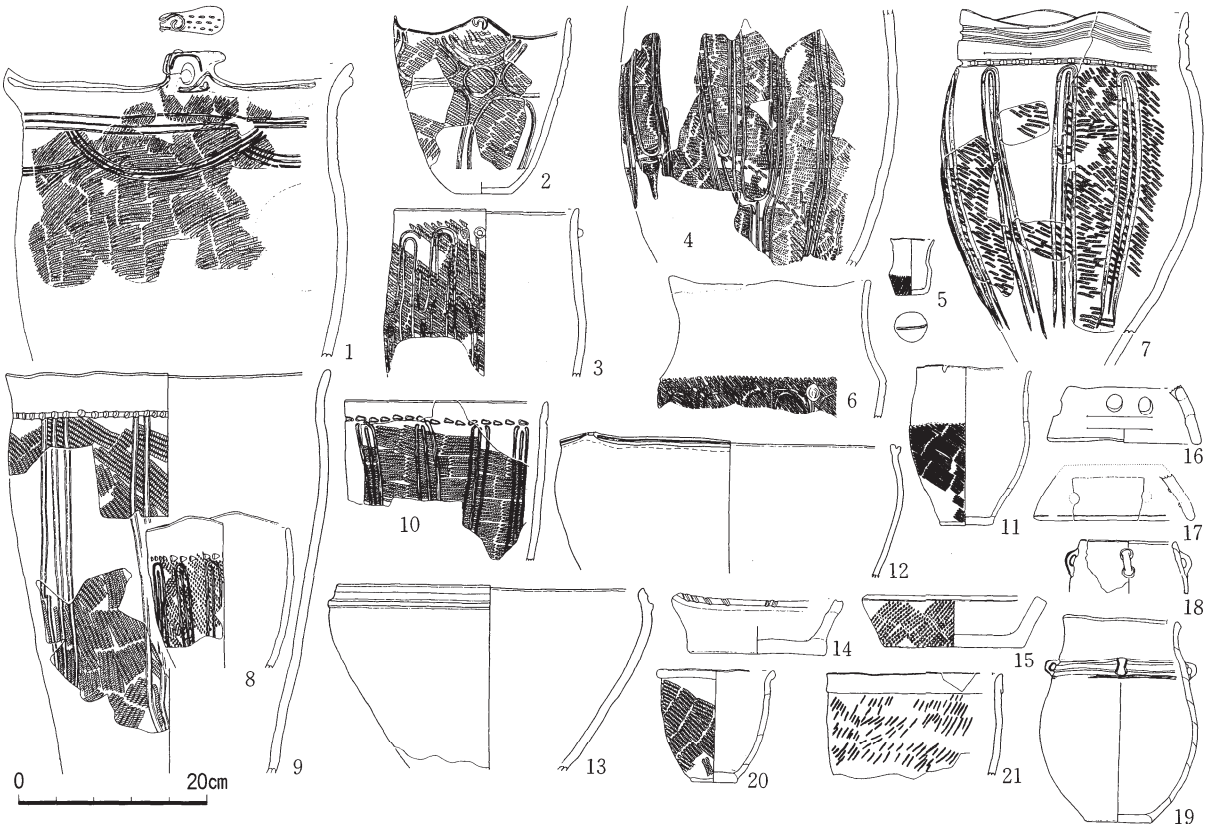


図40　青森市三内沢部遺跡出土々器（1．共伴関係）



青森市三内沢部遺跡出土々器（２）

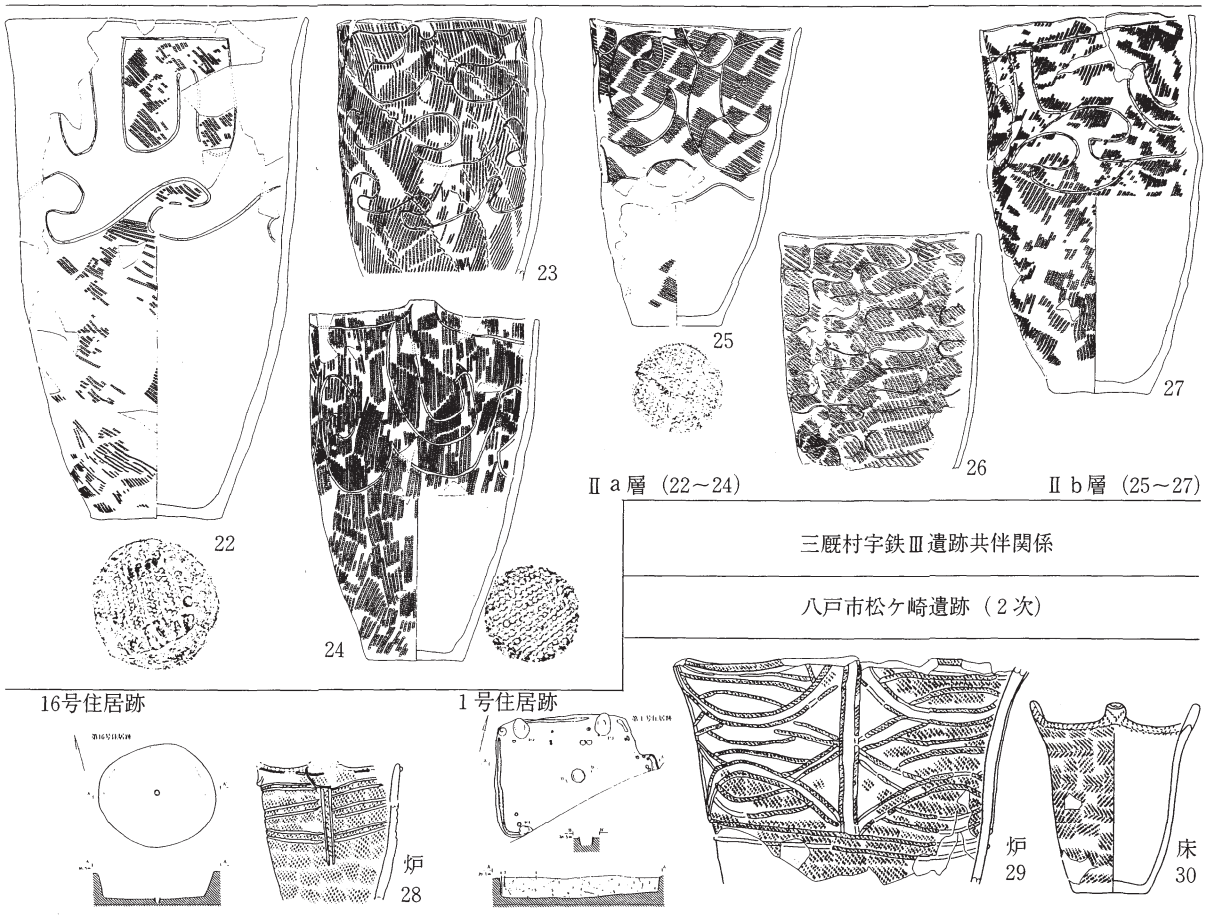


図41　青森県三内沢部、宇鉄Ⅲ、松ケ崎遺跡出土々器

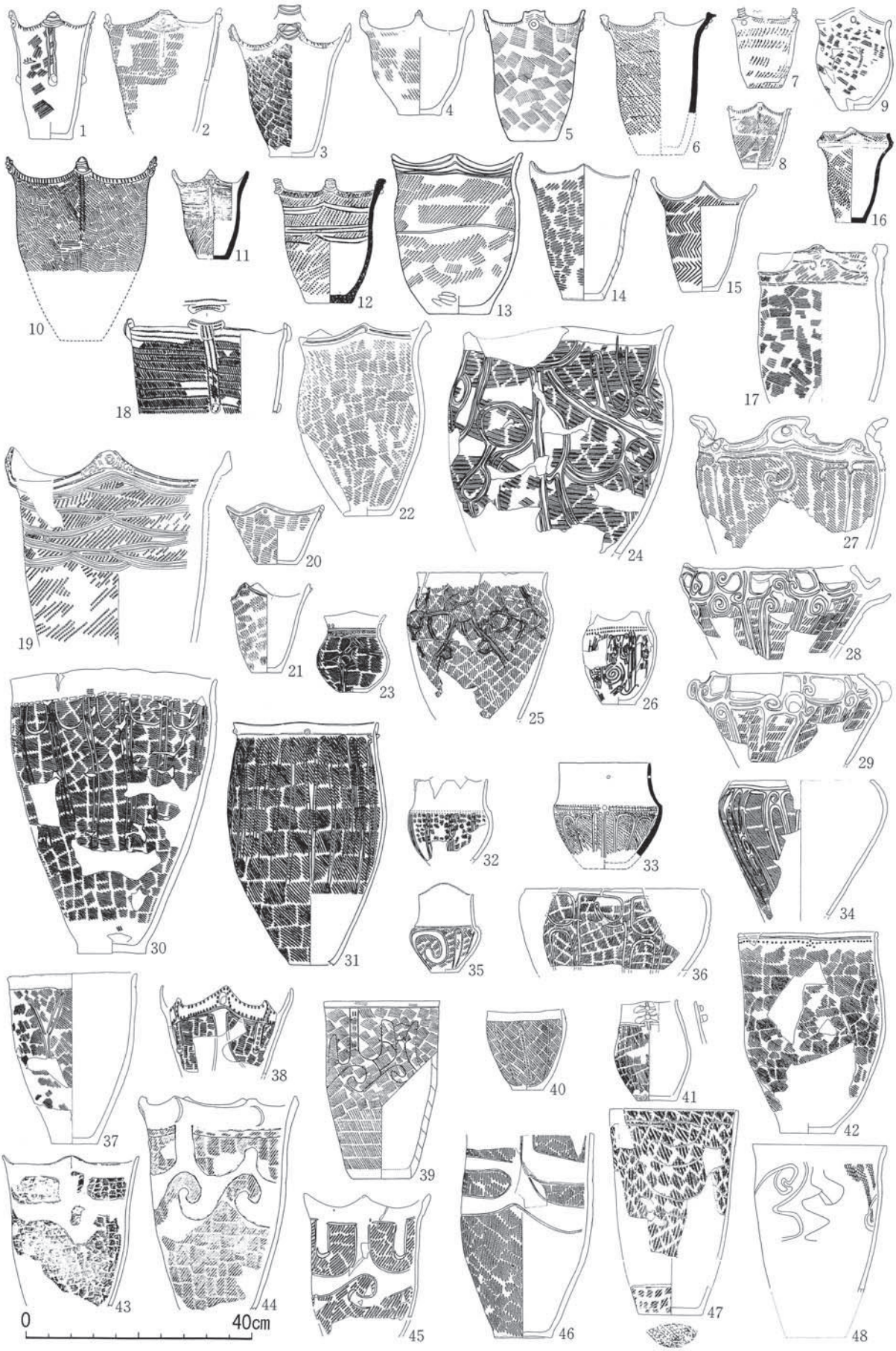


図42　青森県内諸遺跡出土の中期後半の土器



図43　岩手県九戸村田代遺跡出土々器（１）

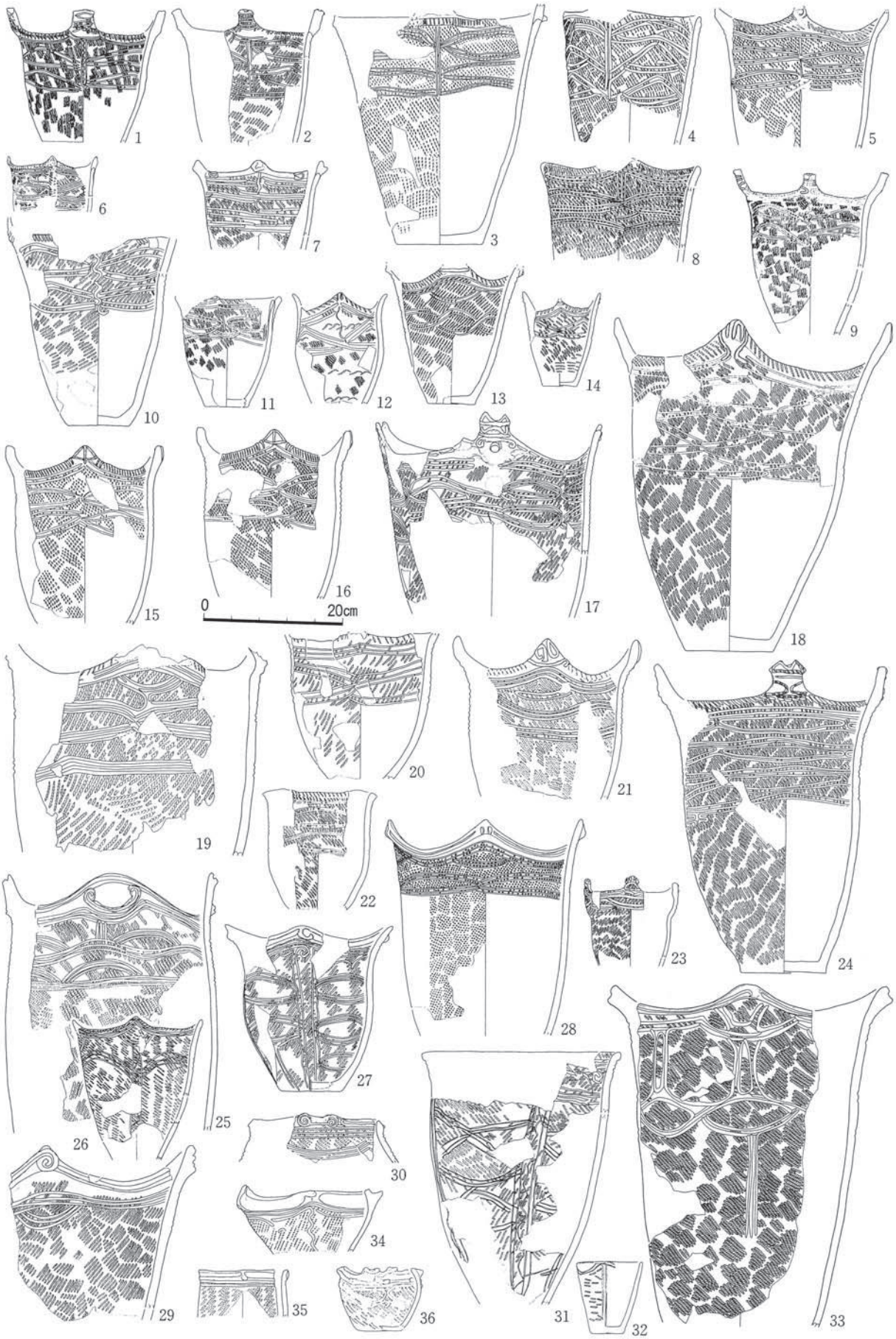


図44　岩手県九戸村田代遺跡出土々器（２）

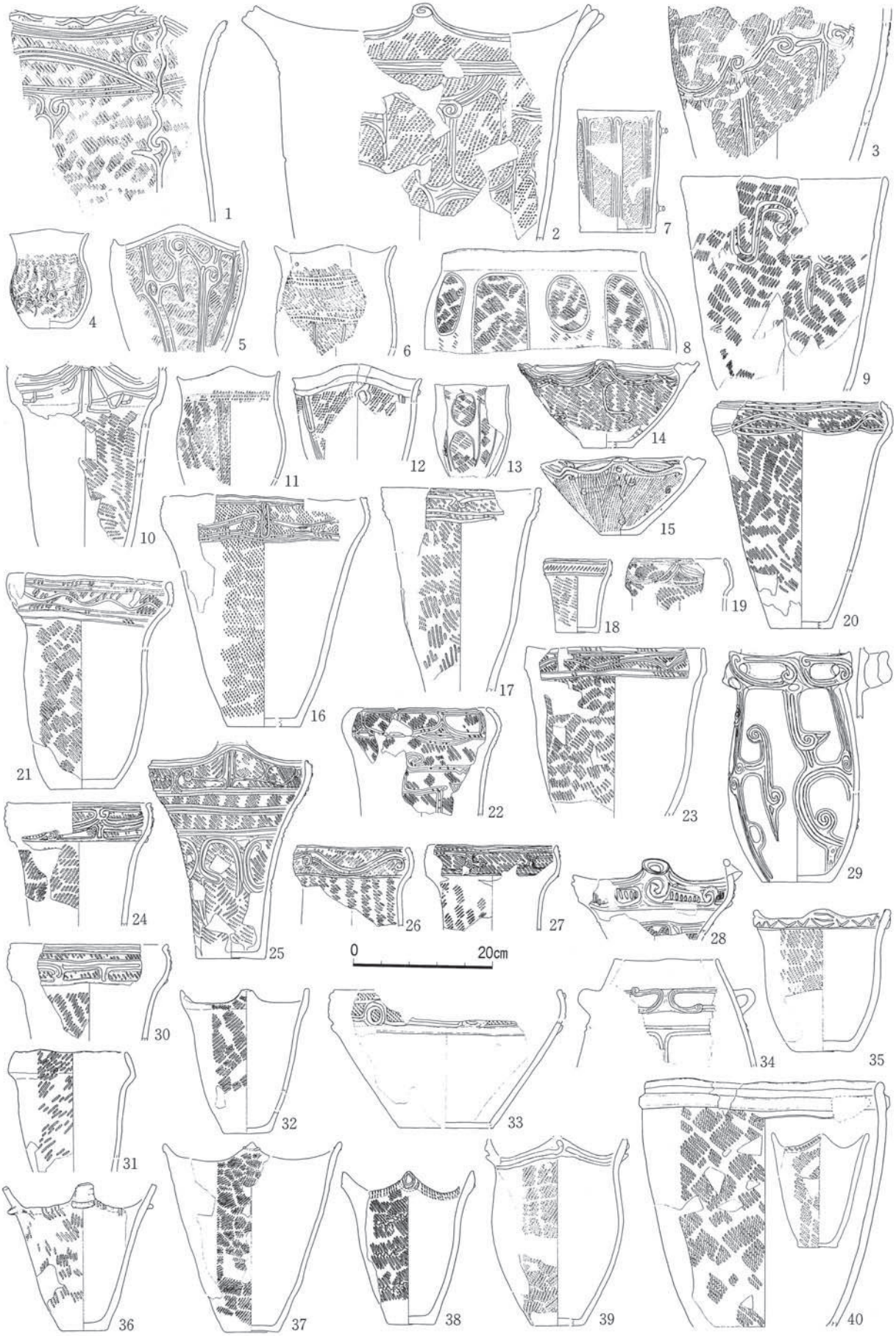


図45　岩手県九戸村田代遺跡出土々器（３）

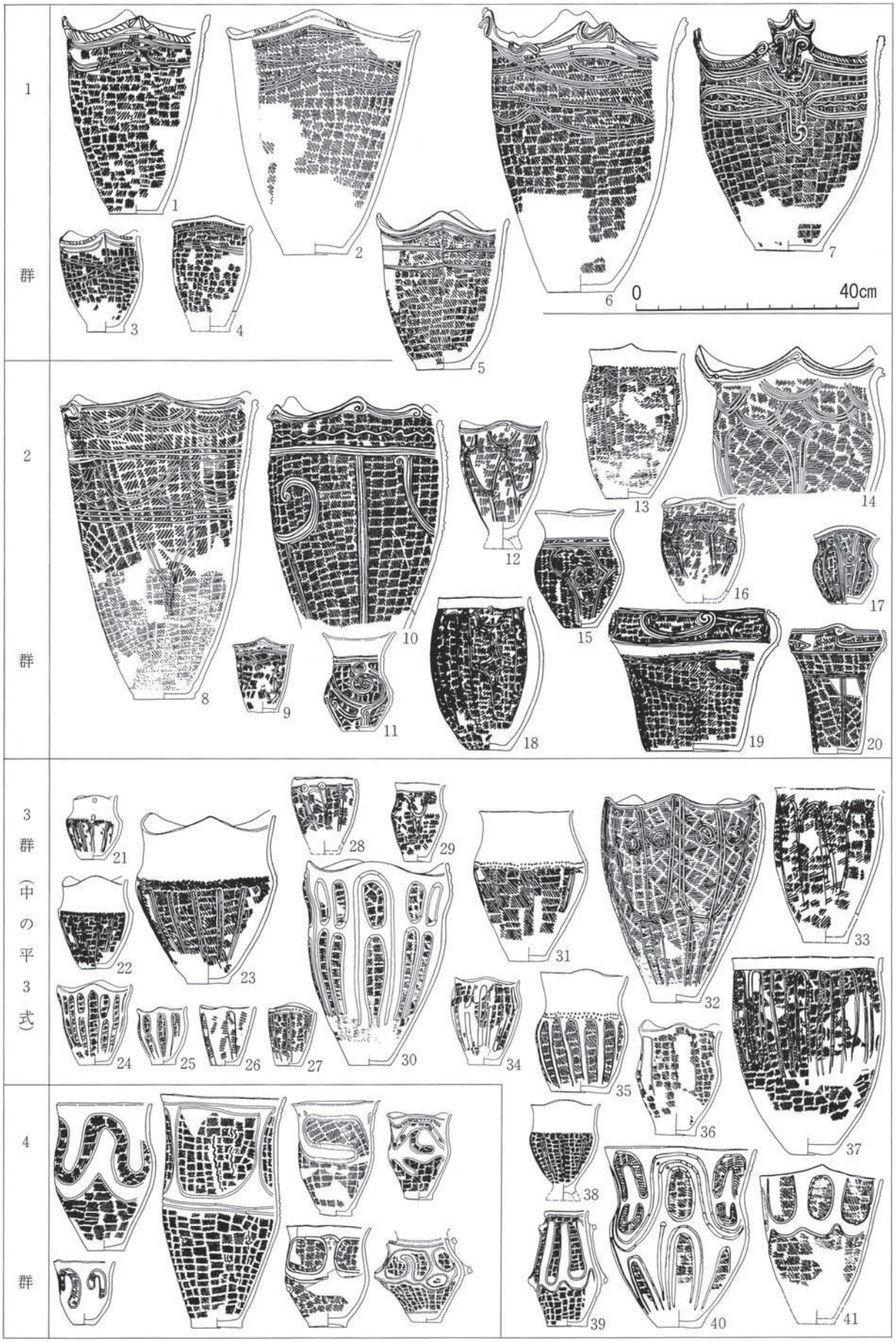


図46　秋田県鹿角市天戸森遺跡出土々器